

シーボルトが収集した国絵図・出版図と和紙見本帳について

——蒐集と公開の十九世紀——

杉本史子・村岡ゆかり・国木田明子・高島晶彦

はじめに

科学研究費補助金・基盤(A)「地図史科学の構築—前近代地図データベース・公開のために」(代表・杉本史子)では、二〇〇七年九月十七日二〇日ライデン大学図書館、十八日十九日国立民族学博物館に収蔵されるシーボルトコレクションについて、両館の御厚意により、科学研究費補助金・基盤(B)「ライデン大学シーボルト国絵図の地図史研究」(代表・小野寺淳)と、左記のような合同調査を行った。本稿の、一章「蒐集と公開の十九世紀」(杉本史子執筆)、二章「ライデン大学所蔵国絵図—色料と描写」(村岡ゆかり執筆)、三章「ライデン大学所蔵国絵図—について」(国木田明子執筆)、四章「ライデンの国立民族学博物館『大日本諸国名産紙集』について」(高島晶彦執筆)は、この調査の成果の一部である。

【調査対象】

ライデン大学図書館所蔵 国絵図・出版図・『日本』
国立民族学博物館 和紙見本帳「大日本諸国名産紙集」
【調査メンバー】※肩書きは、調査時点のもの
小野寺淳(茨城大学)、橋本暁子(茨城大学・院生)、横山貴史(茨城

大学・院生)、中尾千明(奈良女子大学・院生)、大島規江(国際教養大学)、野積正吉(射水市新湊博物館)

杉本史子(東京大学)、磯永和貴(東亜大学)、ロナルド・トビ(イリノイ大学)、国木田明子(神戸市立博物館)、村岡ゆかり(東京大学)、高島晶彦(東京大学)

【調査内容】

色彩材料・紙質、所蔵印、書誌事項、内容について、目視による調査カードを作成した。また、顕微鏡写真(口絵3・5・6)、デジタル写真、四×五フィルム写真(ライデン大学のみ)の撮影を行った。

一 蒐集と公開の十九世紀

シーボルト・コレクション形成の背景

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトについては、これまで膨大な研究成果が蓄積されてきた。しかし、日本国内外に散在する膨大なそしてあらゆる分野にまたがるコレクションと、代表的著書『日本』のテキスト確定が著しく困難である¹⁾という事情が、その統一的全体像検討の難しさを生んでいる。

そのなかで、従来の、日本の学術発展に寄与しヨーロッパに日本を紹介した、日本にとつてのいわば恩人としての「シーボルト先生」という位置づけだけでなく、十九世紀の「植民地科学者」群のひとりとしてのシーボルトの評価もまた出されてきている。ドイツ―日本研究所、江戸東京博物館、国立民族学博物館『シーボルト父子のみた日本 生誕二〇〇年記念』の展示および図録出版(ドイツ―日本研究所、一九九六)は、そのひとつの契機をなしたといつてよいだろう。

同書に収められた諸論考は、激動のヨーロッパ世界のなかのシーボルト父子を浮き彫りにしている。シーボルトは、すでに内実を失っていた神聖ローマ帝国下の教会領ヴェルツブルク(後に領邦国家バイエルンと合併)に生まれ(一七九六年)、ヴェルツブルク大学で医学を学んだ。そして、当時のドイツ諸邦の若者にとつて選択肢のひとつであったオランダ陸軍に入隊(国籍を移さず、オランダ軍務に服する許可をバイエルン王から得ている)⁽³⁾、オランダ東インド会社医師として、一八二三年出島に到着した。

このような経歴をもつシーボルトという若者が、なぜ、日本の膨大な文物を蒐集しまたそれに基づいて執筆するという行為に生涯の多くの時間を費やすことを選択したのであろうか。そこには、個人の純粋な学問的探究心だけでは説明できない、時代背景が存在していたのではないだろうか。

この疑問に全面的に答える用意は本稿にはないが、後述するオランダの国家状況以外に、とりあえずふたつの前提をあげることができよう。ひとつには、十九世紀ヨーロッパで自然科学のみならず社会科学諸分野でも設立され始めた、学会という(人間結合様式)であり、ふたつには、博物館に代表される公開の(場)の成立である。これらの社会制度や仕組みを前提にして、はじめてシーボルト・コレクションは生み出された。

民族学・博物館学の成果のなから、とりあえず大急ぎでこの事情を素描してみよう。大航海時代以来、ヨーロッパでは、「発見」した「未開」民族や文化をどう理解し位置づけていくかという課題のなかで人類学・民族学的関心が生まれていた。十九世紀末から二〇世紀、これらは独立した学問分野として定着していった。またフランス革命とナポレオン戦争を経て、ヨーロッパ諸国では公共博物館の簇生をみた。公共博物館の誕生は、一部のエリートのみが享受していた貴重な品々の、民衆への解放を意味していた。同時に、従来の、階級によって峻別されていた文化から、支配階級が被支配を教化する公共文化へと変化するなかで、十九世紀には、博物館が、国家の文化政策の機能を担うものとして明確に位置づけられていく。ヨーロッパの人々の外部に対するまなざしは、植民地経営・帝国主義と関わって、民族学博物館建設へと向かい、内部に対するそれは、産業革命によって失われた農村や田園へのノスタルジア―しばしばナショナリズムと結びつく―ともあいまって、十九世紀後半民俗学博物館建設へと向かった。⁽⁴⁾

シーボルトが赴任したバタヴィアには、植民地における科学者集団＝学会の嚆矢ともいえる「バタヴィア学芸協会」が存在していた。⁽⁵⁾そして、出島でシーボルトを迎えた商館長ヤン・コック・ブロンホフは、王立骨董陳列館初代館長や東インド総督から王立骨董陳列館列品の蒐集の命を帯びており、従来の商館長にはみられなかった使命感を持っていたと指摘されている。⁽⁶⁾当時オランダはフランスの支配から脱し一八一五年王国として独立、国王ヴィレム一世は旧オランダ統治領の回復に力を注ぎ、東インドを取り戻した。そのような状況の中で、本国が独立を失っていた時期もオランダ国旗を掲揚しつづけた出島は、オランダ国内で「感激をもって祖国同様に語られた」。ブロンホフは、日本についての包括的なコレクションを作り上げ、巨大な出島の模型で王立骨董陳列室を飾っ

たのである。⁽⁷⁾

シーボルト自身、一八二三年のバタフィア政庁宛の報告書で、「王立博物館のために日本の珍奇品の完全な収集を入手すること」、毎年論文をバタフィア学芸協会とオランダの学会に送付することを約束している。一八二四年には「日本人の完全な骸骨を購入したいか」伺いを出している。⁽⁸⁾

いわゆる「シーボルト事件」で一八三〇年に離日したシーボルトは、バタフィアを経てヨーロッパに帰ったあと、バイエルン国王、オランダ国王、パリ国立図書館長に、それぞれ民族学博物館の設立提案・構想提案を行っている。このうちオランダ国王はシーボルトのコレクションを買い上げ、自宅で管理することを決定した。このライデン「日本博物館」のコレクションの流れは、その後一八八三年、王立骨董陳列館や、アムステルダムで開催された国際植民地博覧会のオランダ部門展示物をも吸収し、一九三七年「国立民族学博物館」と命名された。ライデンの国立民族博物館は、こんにち、世界最初の科学的な民族博物館として自認されている。⁽⁹⁾

シーボルトは二度目の来日（一八五九〜六二年）によって形成したコレクションをも、オランダ政府、バイエルン政府に売却を打診している。後者が興味を示したため、コレクションをミュンヘンに移し、王宮庭園に隣接する旧絵画館で展示することができた。しかし購入の決定がなされる前に、展示準備中の罹患により死去した（一八六六年）。そして、二〇〇〇年前後にヨーロッパの主だった民族学博物館が軒並み展示替えを行ったことに見られるように、民族学博物館という枠組みは今日まさに問い直されている。⁽¹⁰⁾

シーボルトは、一八三二年、『日本』をライデンでドイツ語により自費出版、その後オランダ語版、フランス語版、ロシア語版も刊行した。

一八三四〜五年には資金調達を兼ねて、ヨーロッパ各地の宮廷等を廻り、予約募集を行っている。フランス語版の予約募集書には、日本国（「原住民の間では「ニッポン」と呼ばれる」と注記されている）が「旧世界の極東、危険な海の中に位置し」、長い間ほとんど（ヨーロッパ世界に）知られることがなかったこと、十六世紀にポルトガル人によって発見された後は、オランダ人そしてロシア人によって研究されてきたが、十分であり、本書にまとめられたシーボルト氏の研究は、「未知の文明の見事な絵を私たちの目の前で繰り広げる」と書かれていた。⁽¹¹⁾

ライデン大学所蔵の国絵図写・刊行図

ライデン大学での絵図調査は、国絵図写（本論文末尾の表2）・出版図を中心に行った。

シーボルトと地図については、従来、シーボルト事件の引き金となった日本地図や当時領土問題となっていた北方図がもっぱら注目されてきたが、実は、シーボルトの地図への関心は、政治情報の獲得という範囲を超えて、日本における地理学と歴史の発展、日本人の自国領土の発見史という広い文脈のなかにあった。

『日本』⁽¹²⁾の著述の中で、シーボルトは日本における陸地図を「われわれの地図」と同じく、（1）一般地図と（2）特別地図に分けられるとしている。（1）一般地図の例として挙げられるのは、一八二二年江戸の天文方で作られた銅版の「日本国および隣接するアジア大陸の一般地図」（高橋景保「日本辺界略図」）、「日本の書店にあり、教養ある人々の手許に見出される一般地図」（長久保赤水「改正日本輿地路程全図」）である。（2）特別地図は、特定の地域を描いたものを指し、印刷図と手書図がある。

手書特別図の第一種は、「土地面積の二万七千分の一から五万分の一

(47) シーボルトが収集した国絵図・出版図と和紙見本帳について（杉本・村岡・国木田・高島）

という異常なほど大きな縮尺で作成されており、またそれゆえに真に重要な意味を持つ地形図」、すなわち、幕藩領主が作成させた手書国絵図である。シーボルトは、「日本の紙は強く耐久性があるため、なかには四ないし五平方メートルもある巨大な紙面に一国を描くこともできる」と、その支持体の材質と、地図の巨大さに注目している。そして、この種の地図は、各藩において作られていること、すでに九世紀から作成されているが、彼が持ち帰ったのは、前世紀（十八世紀）のものであり、「ヨーロッパへもたらされた、最初の、そして唯一独特なもの」であると位置づけている。また、手書特別図第二種として、二十五万分の一（これらはより大きい地形図を縮小してスケッチしたもの）がある。シーボルトの記述からは、彼が、国絵図をどのようにとらえていたかを見ることが出来る。しばらく、『日本』の記述をみてみよう。

- (A) 図の内容は、
- 山・川（極小の支流に至るまで描かれている）
 - 森林・叢林
 - 都市から最小の村までのあらゆる場所
 - 神社・仏閣、その他興味ある土地
 - 国を区分する境界
 - 水・陸路、街道（正確な距離ごとの里程標）であり、
 - すべての自然・人工の産物には名称がつけられている
 - 地域を示す名札（その中に宿場の数、領主の収入額記入）がある
- (B) 欠点としては、
- 川の記入が比較的大きすぎる
 - 山は山型または丘陵形に描かれる
 - 都市その他の場所はそのままの姿ではなく、同じ大きさの四

角または卵形の札の姿に示される

- (C) 描写の特質としては、
- 仕上げは日本の筆の精巧さをしめす
 - 輪郭は非常に美しく明瞭
 - 水や山は淡い色合い
 - 道や国境は力強く朱や墨で記入
 - 字は中国や日本の書をもみると同様に、書き手の勤勉さ・忍耐強さを物語る

特に、(B) の欠点として挙げている諸点は、当時のヨーロッパ知識人からみた国絵図の地形・事物描写上の違和感―特質を指し示して興味深い。

こんにちライデン大学には、シーボルトが持ち帰った国絵図写が収蔵されている。国外コレクシヨンのなかで、これほど多量の国絵図写が含まれているものは、他に例をみない。

今回の調査にあたっては、マテイ・フォラー氏から、シーボルトのコレクシヨンと、前述の商館長ヤン・コック・ブロンホフ（日本滞在一八一七―一八二三年）、出島の蔵管理責任者オーフェルメール・フィッセル（日本滞在一八二〇―二九年）のそれぞれの収集物との関係について貴重なご教示をいただいた。フォラー氏はすでに、シーボルトの収集活動において、ブロンホフ、フィッセルの収集物が組み込まれていた過程を明らかにしている。¹³このため、調査では、国絵図写について、シーボルト、ブロンホフ、フィッセルのそれぞれの印影確認をおこない、ブロンホフ印・フィッセル印のない、シーボルトの収集によるものであることを確認した。これらの国絵図写をシーボルトがどのようなルートで入手したか、あるいはどのような状況で書写したのか、今後の興味ある検討課題と言える。

また、ライデン大学所蔵の出版図については、販売当時の袋が残されているもの（日本に残されたものからは往々にして失われている）について、今回調査対象とした。

国立民族学博物館所蔵『大日本諸国名産紙集』について

『大日本諸国名産紙集』（架番号1-3060）は、シーボルトが、大坂で購入した紙類を、各一枚ずつ取り出し、袖部分を和綴じで冊子としてまとめたものと考えられる。

科研「地図史料学の構築」は、江戸時代において絵図作成に使用された材料の検討を共同研究の課題のひとつとしている。稲葉政満氏のご教示により『大日本諸国名産紙集』の存在を知り、購入場所・時期が明確な和紙コレクションとして、この材料研究の重要な手がかりを与えてくれるものと考え、フォラー氏にお願いし、調査のご許可をいただいた。

本史料の第一に重要な点は、表紙にあわせて各紙を裁断することはせず、折り込むことよって大きさをそろえるなど、大きさも含め、原型をできるだけ改変せずに、綴じこむ配慮がなされていることである。ただし、各紙の袖部分は切断された可能性もあるが、紙を染める際の固定枠の痕跡がみとめられるものがあることなどから、この部分の切断も最小限にとどめられたと推測される。江戸時代に残された紙コレクションのなかで、裏打ちなどの処理を施されず、原型を生かしたかたちで伝えられてきた点は、本史料の研究対象としての大きな利点といえる。

なお「諸国・・」に綴じるため、一枚ずつ抜き取った元の紙束も現存しているが、今回は調査できなかつた。

また、本史料の特徴のふたつめにあげられるのは、各紙の産地と紙名称が、紙に直接書き込まれていることである。歴史研究において近年進められている紙研究の困難性は、文献史料に記された紙名称と、現在残

された紙の照合にあることを考えると、このことの持つ意味は重要である。

しかも、カタカナ表記であるという特徴（表4）をもっている。通常の漢字表記では窺うことのできない、書き付けられた時点の音声による読みを反映していると考えられ、貴重である。

〔註〕

(1) 講談社学術局・臨川書店出版部編『シーボルト『日本』の研究と解説』（講談社、一九七七）、斉藤信「シーボルト『日本』の最終刊行年とその全体構想について」（シーボルト『日本』第六巻、雄松堂書店、一九七九）注(12)参照。

(2) 同書のマテイ・フォラー「ライデン王立民族学博物館におけるシーボルト・コレクションについて」、ヨーゼフ・クライナー「三人の「日本のシーボルト」の生涯と業績」。マテイ・フォラー「プロンホフの見た日本・見せたかった日本」（西和夫編『建築史の回り舞台―時代とデザインを語る』（彰国社、一九九九）

(3) 緒方富雄「シーボルトとZIPPON―概説」（前掲『シーボルト『日本』の研究と解説）

(4) 高橋雄造『博物館の歴史』（法政大学出版局、二〇〇八）

(5) 塚原東吾・篠田真理子・伊藤憲二・松村紀明・綾部広則・柿原泰・本間栄男・杉山滋郎「科学史の側面から再検討したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの科学的活動―植民地科学、ベーコンニアン科学、フンボルトニアン科学とシーボルトの科学的活動との関係についての試論」（『鳴滝紀要』六、一九九六）

(6) 松井洋子「商館長プロンホフとその江戸参府」『オランダに渡った大工道具』、国立歴史民俗博物館、二〇〇〇年）

(7) 前掲マテイ・フォラー「プロンホフの見た日本・見せたかった日本」

(8) 栗原福也「出島からバタフィアへ―フォン・シーボルトの日本調査報告書一八二三、二四年」（『東京大学史料編纂所紀要』一〇、二〇〇〇）

(9) ウィレム・R・ファン・ヒューリック「ライデン国立民族学博物館小

史」(京都国立博物館・東京国立博物館・朝日新聞社編『シーボルトと日本』朝日新聞社、一九八八)、アルレット・カウヴェンホーフェン、マテイ・フォラー『シーボルトと日本 その生涯と仕事』(Hofa) 出版、二〇〇五)、吉田憲司『文化の「発見」』(岩波書店、一九九九)

(10) 竹沢尚一郎「民族学博物館の現在―民族学博物館は二一世紀に存在しうるか」(『国立民族学博物館研究報告』二八、二〇〇三)

(11) 以上、『日本』出版については、宮崎克則『シーボルト『NIPPON』の色つき図版』(九州大学総合研究博物館研究報告) 五、二〇〇七)・同『シーボルト『NIPPON』のフランス語版』(九州大学総合研究博物館研究報告) 六、二〇〇八)

(12) シーボルト『日本』第一巻(中井昶夫、雄山堂書店、一九七七年)。注1に示した『シーボルト『日本』の研究と解説』に収録されている緒方富雄・藤田喜六論文および齊藤信論文にも示されているように、『日本』は元来仮綴本で分冊して出版され、現存するものに完全に同一のものは存在しない。シーボルト自身が既刊分をまとめて出版したはずの再刊分の現存は確認しえない。シーボルトの子アレクサンダーらにより出版された縮刷版には、アレクサンダーによる加筆の部分がある。雄山堂による訳本はこの事情を考慮し、日蘭学会による初版本・三版本を交えた復刻本を、さらに順序などを変更し訳出したものである。

(13) 「ライデン国立民族学博物館蒐蔵日本美術の来歴」『秘蔵日本美術大観 九 ライデン国立民族学博物館』(便利堂、一九九三)、フォラー前掲論文。

なお、本章執筆にあたって、シーボルトに関する研究史については、沓沢宣賢氏(『シーボルト研究史概観』(『季刊日本思想史』) 五五、一九九九)、松井洋子氏から、文化人類学と博物館については、斎藤晃氏から貴重なご教示をいただきました。感謝いたします。

(一章執筆 杉本史子)

二 ライデン大学所蔵国絵図―色料と描写

二〇〇七年九月十七日から九月二十日にかけて行われた、ライデン大学図書館所蔵絵図調査の内、国絵図十七点を色料と描写を中心に調査を行った。

調査の内容は、海・川・山・境界線・村形などのモチーフを裸眼と計測顕微鏡(ピーク・ワイド・スタンド・マイクロスコプ×100 東海産業社製)を使用した目視での観察を行い、同地点を計測顕微鏡で撮影を行ったものである。ただし、目視のみの調査であったため、部屋の照明等の影響で色の印象が変化したことから、色料を確定することは困難であり、すべて推定に基づくものである。

文中の色料の表記は、色の推定が行えたものは色料名を記し、不明なものは一般的な色の名称とした。

調査した絵図の彩色は、全体的に淡彩で彩色された印象がある。推定使用色料は、主に墨・朱・藍・胡粉・丹・藤黄・ベンガラ・臘脂の単色使用か、二色か三色を使用した重ね塗りや混色使用であると思われる。また、緑青や草の汁(藍と藤黄の混色)、藍と推定することのできない緑色や青色、また混色の可能性が低く、単色と推定される紫色の色料があった。これらは、本文中の Ser. 284 播磨国絵図、Ser. 285 備中国絵図、Ser. 285 山城国絵図、Ser. 280 河内国絵図に確認され、「緑色」「青色」「紫色」と表記した。

今回の報告は、推定色料などの調査概要を絵図ごとに紹介するものである。

なお、計測顕微鏡撮影は橋本暁子氏が行った。

Ser.271 近江国絵図

一紙を南北を境に東と西部分に二紙として分けられ、折図として保

Ser.273 能登国絵図 [図9]
村形は各円の中に着色が行われているのではなく、円周部分に着色が行われる表現となっている。
海岸／藤黄か [図7・8]、道／朱か、屋根／ベンガラか、葉／草の

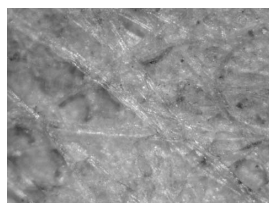


図2 『Ser.271 近江国絵図』
山部分顕微鏡写真

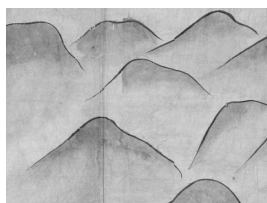


図1 『Ser.271 近江国絵図』
山部分



図4 『Ser.271 近江国絵図』
道部分顕微鏡写真

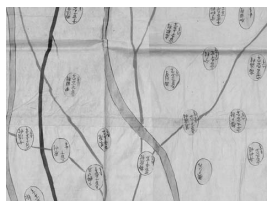


図3 『Ser.271 近江国絵図』
道部分

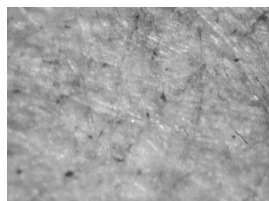


図6 『Ser.271 近江国絵図』
湖部分顕微鏡写真



図5 『Ser.271 近江国絵図』
湖部分

存されている。地色は少し黄ばみがあり、張りが感じられる。
山／草の汁か [図1・2]、道／朱か [図3・4]、湖／藍か [図5・6]、三井寺／藤黄か、村形 (高嶋郡)／丹か、村形 (浅井郡)／ベンガラか、村形 (伊香郡)／藤黄+丹か、村形 (志賀郡)／青味強い草の汁か、村形 (栗本郡)／藍少なめの草の汁か、村形 (坂田郡)／藤黄か、村形 (犬上郡)／薄いベンガラか、村形 (愛知郡)／丹+胡粉か、村形 (神崎郡)／藤黄+胡粉か、村形 (蒲生郡)／藍+胡粉か、村形 (甲賀郡)／薄墨か、村形 (野洲郡)／薄墨か



図9 『Ser.273 能登国絵図』

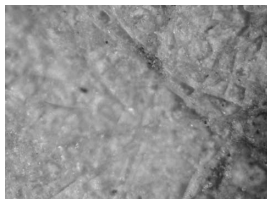


図11 『Ser.273 能登国絵図』
へくら嶋部分顕微鏡写真



図10 『Ser.273 能登国絵図』
へくら嶋部分



図8 『Ser.273 能登国絵図』
海岸部分顕微鏡写真

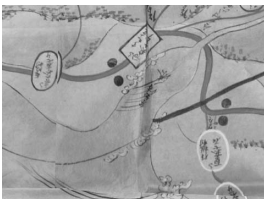


図7 『Ser.273 能登国絵図』
海岸部分

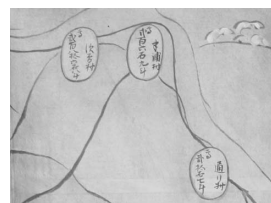


図12 『Ser.273 能登国絵図』
守浦村の円周線部分

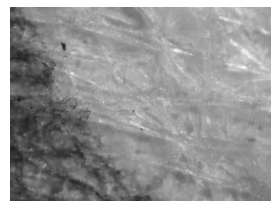


図13 『Ser.273 能登国絵図』
守浦村の円周線部分顕微鏡写真

か、村形(守浦村)の円周線／藤黄か〔図12・13〕、
藍か、村形(時岡村)／

Ser.275 佐渡国絵図

一紙を北西と南東部分に二紙として分けられ、折図として保存されている。凡例は東寄りの中程に示されている。

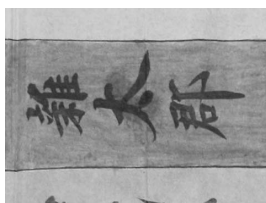


図14 『Ser.275 佐渡国絵図』
凡例(雑太郡)部分

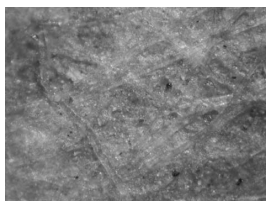


図15 『Ser.275 佐渡国絵図』
凡例(雑太郡)部分顕微鏡写真

例(加茂郡)／藤黄か、凡例(羽茂郡)／丹+胡粉か

Ser.282 石見国絵図

一紙を南、西東と北部分に三紙として分けられ、折図として保存されている。

山／草の汁か、道／朱か、葉／緑青か〔図16・17〕、幹／ベンガラと墨か、カラ嶋／藍か、川／藍か、安濃郡／藍+胡粉か、近摩郡／丹か、

汁か、海／藍と胡粉か、へくら嶋／藤黄+丹と墨か〔図10・11〕、村形の円周線／胡粉か・墨と藍か・緑青か、村形(今田村)の円周線／緑青

／朱か、波／藍か、村形(芝野村)／丹か、村形(二見村)／膳脂か、村形(加茂村)／藤黄か、凡例(雑太郡)／膳脂か〔図14・15〕、凡



図16 『Ser.282 石見国絵図』
葉部分

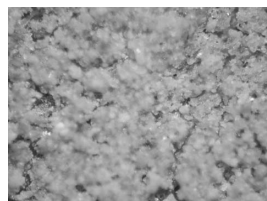


図17 『Ser.282 石見国絵図』
葉部分顕微鏡写真

鹿足郡／藍か、色智郡／藤黄か、那賀郡／藤黄+墨か、美濃郡／丹+藤黄+胡粉か、濱田城／朱か、津和野城／朱か

Ser.284 播磨国絵図〔図18〕

山／緑色、海／青色〔図19・20〕、加古郡／藤黄か、印南郡／ベンガラか、加西郡／藤黄+胡粉か、加東郡／黄緑色、佐用郡／朱+墨か、

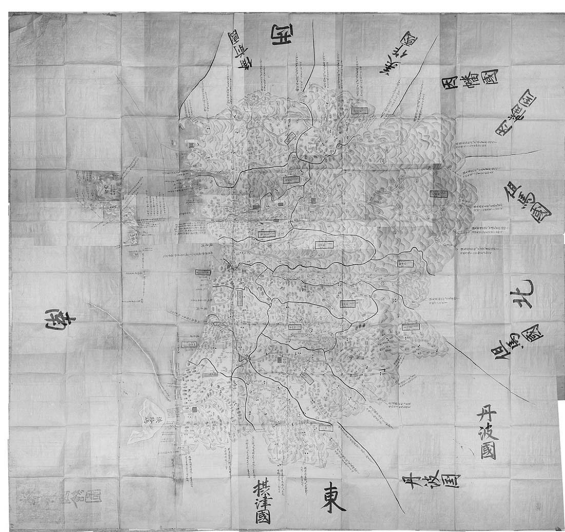


図18 『Ser.284 播磨国絵図』

三木郡／不明、神西郡／藍+丹か、赤穂郡／藍+胡粉か、多可郡／丹+藤黄か、明石郡／丹か、楫西郡／丹+藤黄+墨か、楫東郡／不明、飭西郡／藍+藤黄か、完栗郡／緑色、備前国／丹+藤黄+墨か、美作国／藤黄か

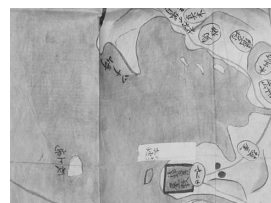


図19『Ser.284 播磨国絵図』海部分

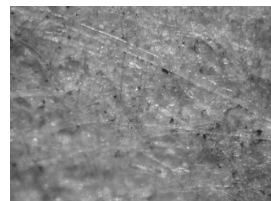


図20『Ser.284 播磨国絵図』海部分顕微鏡写真

Ser.287 美作国絵図

山／草の汁か〔図21・22〕、葉／緑青か、幹／朱＋墨か、川／藍か、津山城／朱か、勝南郡／藍＋胡粉か、英田郡／丹＋藤黄＋胡粉か、吉野郡／丹＋藤黄＋藍か、久米南條郡／草の汁か、久米北條郡／藤黄か、勝北郡／丹＋藤黄か、真嶋郡／朱＋墨か、西々條郡／藍か、西北條郡

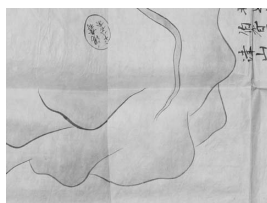


図21『Ser.287 美作国絵図』山部分

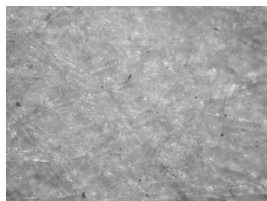


図22『Ser.287 美作国絵図』山部分顕微鏡写真

／ペンガラか、大庭郡／藤黄＋墨か、東南條郡／藤黄＋胡粉か、東北條郡／朱か

Ser.288 備前国絵図

幹／墨と岱赭か、葉／墨と草の汁か〔図23・24〕、川／藍か〔図25・26〕、岡山城／朱か〔図27・28〕、海／藍か、山／草の汁、道／朱か、村形（岩生郡）／墨か、村形（三野郡）／丹か、村形（児島郡）／丹＋藤黄＋胡粉か、村形（上東郡）／草の汁か、村形（上道郡）／藤黄か、村形（赤坂郡）／藍か、村形（津高郡）／藍＋丹か、美作境／藤黄か



図23『Ser.288 備前国絵図』葉部分

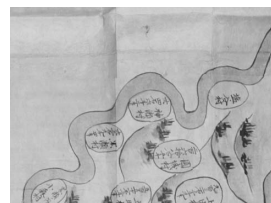


図25『Ser.288 備前国絵図』川部分

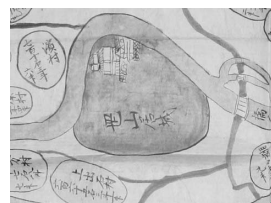


図27『Ser.288 備前国絵図』岡山城部分

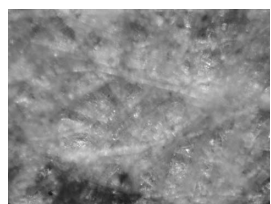


図24『Ser.288 備前国絵図』葉部分顕微鏡写真

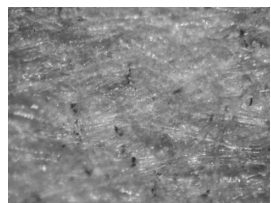


図26『Ser.288 備前国絵図』川部分顕微鏡写真

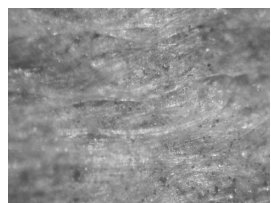


図28『Ser.288 備前国絵図』岡山城部分顕微鏡写真

Ser.289 備中国絵図〔口絵1〕

海／藍か〔口絵2・3〕、山／深緑色の上に草の汁と墨か、道／朱か、川／藍か、下道郡の古城／藍と黄土か藤黄＋胡粉か、村形（阿賀郡）／藍＋胡粉か、村形（川上郡）／丹か〔口絵4・5〕、村形（後月郡）／草の汁の上に白緑か、村形（小田野郡）／臙脂か、村形（下道郡）／丹＋藤黄＋胡粉か、村形（加陽郡）／白緑＋胡粉か、村形（窪田郡）／藤黄か、村形（上房郡）／草の汁か、村形（浅江郡）／朱＋墨か、村形（哲田郡）／藍＋丹＋胡粉か、村形（都宇郡）／藤黄＋墨か

Ser.290 淡路国絵図

海／藍〔図29・30〕か、山／藍か、航路／朱か、川／藍か、岩／草の汁と丹＋藤黄か、葉／草の汁と墨か、村形（三原郡）／丹＋藤黄か、村形（津那郡）／藍か

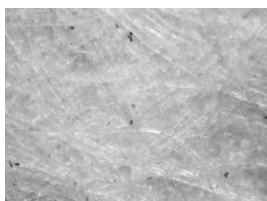


図32 『Ser.255 山城国絵図』
葉部分顕微鏡写真

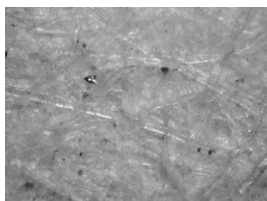


図34 『Ser.255 山城国絵図』
内裏部分顕微鏡写真

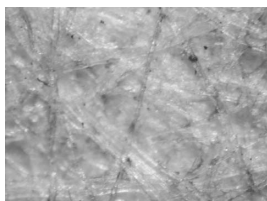


図36 『Ser.255 山城国絵図』
山部分顕微鏡写真

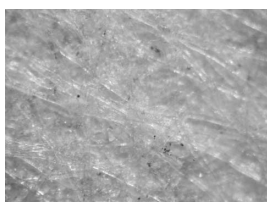


図38 『Ser.258 大和国絵図』
川部分顕微鏡写真



図40 『Ser.258 大和国絵図』
山部分顕微鏡写真

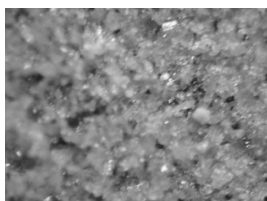


図42 『Ser.258 大和国絵図』
葉部分顕微鏡写真



図31 『Ser.255 山城国絵図』
葉部分



図33 『Ser.255 山城国絵図』
内裏部分

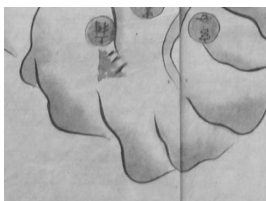


図35 『Ser.255 山城国絵図』
山部分



図37 『Ser.258 大和国絵図』
川部分



図39 『Ser.258 大和国絵図』
山部分

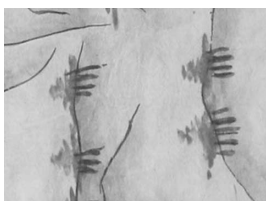


図41 『Ser.258 大和国絵図』
葉部分

Ser.255 山城国絵図
葉／緑色〔図31・32〕、内裏／丹＋藤黄か〔図33・34〕、山／緑色〔図35・36〕、淀／朱か、幹／ベンガラか、道／朱か、屋根(寺)／薄墨か、城／朱か、川／藍か、凡例―村形(綴喜郡)／藍＋胡粉か、伏見／紫色、丹波国／藤黄か、凡例―村形(愛宕郡)／丹か、凡例―村形(宇治郡)／

ベンガラ＋墨か、凡例―村形(乙訓郡)／丹か、凡例―村形(葛野郡)／藤黄＋胡粉か、凡例―村形(紀伊郡)／墨＋胡粉＋丹か、凡例―村形(久世郡)／朱か、凡例―村形(相楽郡)／藤黄か
Ser.258 大和国絵図
川／藍か〔図37・38〕、山／藍か〔図39・40〕、葉／緑青か〔図41・42〕、吉野の桜／胡粉か、吉野の桜の葉／緑青か、村形(宇多郡)／朱か、村形(宇知郡)／丹＋藤黄＋墨か、村形(葛下郡)／藍＋胡粉か、村形(葛下郡)／藍＋胡粉か、村形(吉野郡)／藤黄か、村形(高市郡)／草の汁か、村形(山邊郡)／丹＋藤黄＋胡粉か、村形(式下郡)／丹＋墨か、村形(式上郡)／薄墨＋不明か、村形(十市郡)／丹＋藤黄か、村形(添下郡)／藤黄＋胡粉か、村形(添上郡)／丹＋藤黄か、村形(忍海郡)／薄墨か、村形(平群郡)／丹か、村形(廣瀬郡)／薄墨か



図29 『Ser.290 淡路国絵図』
海部分

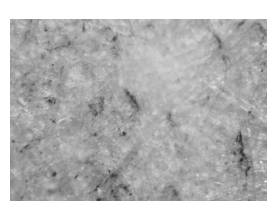


図30 『Ser.290 淡路国絵図』
海部分顕微鏡写真

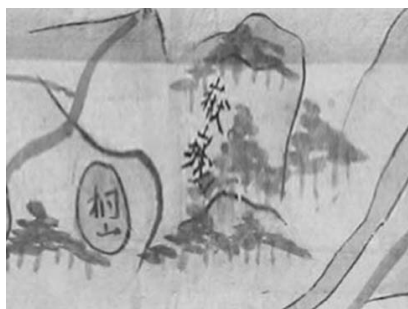


図43【Ser.260 河内国絵図】
葉部分

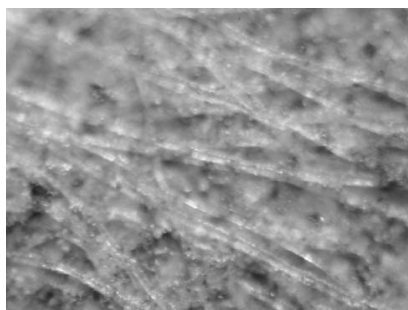


図44【Ser.260 河内国絵図】
葉部分顕微鏡写真

山／草の汁か、葉／藤黄＋白緑か〔図43・44〕、村形(安宿部郡)墨＋藤黄か、村形(安宿部郡)墨＋藤黄か、村形(安宿部郡)墨＋藤黄か、村形(茨田郡)墨＋藤黄か、村形(河内郡)朱＋墨か、村形(錦部郡)藤黄か、村形(古市郡)藍＋藤黄か、村形(交野郡)藤黄＋胡粉か、村形(高安郡)藤黄＋胡粉か、村形(讚良郡)丹＋墨か、村形(志紀郡)藍＋胡粉か、村形(若江郡)緑色、村形(舟南郡)墨か、村形(舟北郡)朱か、村形(渋川郡)緑色＋藤黄か、村形(石川郡)丹か、村形(大県郡)藤黄か、村形(八上郡)墨＋藤黄か

Ser.260 河内国絵図

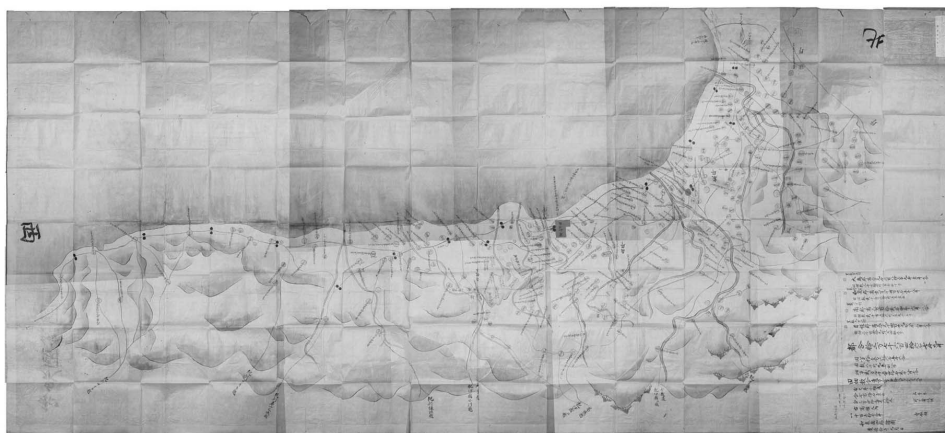


図45【Ser.262 和泉国絵図】

Ser.262 和泉国絵図〔図45〕

葉／草の汁か、山／草の汁か、海／藍か、城(岸和田城)／朱か〔図



図47【Ser.262 和泉国絵図】
城部分顕微鏡写真



図46【Ser.262 和泉国絵図】
城部分

46・47)、境界線／朱か、川／藍か、幹／朱か、凡例－村形(大島郡)／ベンガラか、凡例－村形(和泉郡)／藤黄か、凡例－村形(南部郡)／藍＋胡粉か、凡例－村形(日根郡)／丹か

Ser.265 志摩国絵図

海／藍か、山／草の汁か〔図48・49〕、葉／草の汁か〔図50・51〕、城／朱か〔図52・53〕、土墨／草の汁、城下の道／藤黄か、道／朱か、山／草の汁と藤黄か、釈迦堂／藍か、甲加村／藤黄か、甲府村／丹＋藤黄か、松尾村／墨＋藤黄か、参河国／丹か

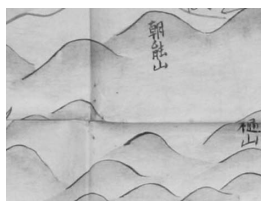


図48〔Ser.265 志摩国絵図〕
山部分



図50〔Ser.265 志摩国絵図〕
葉部分



図52〔Ser.265 志摩国絵図〕
城部分

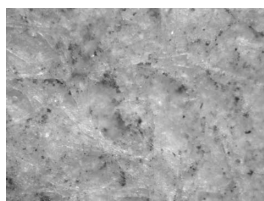


図49〔Ser.265 志摩国絵図〕
山部分顕微鏡写真

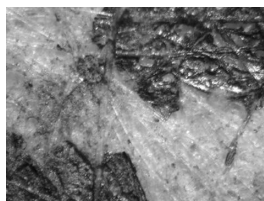


図51〔Ser.265 志摩国絵図〕
葉部分顕微鏡写真



図53〔Ser.265 志摩国絵図〕
城部分顕微鏡写真

Ser.266 尾張国絵図

一紙を南北を境に東と西部分に二紙として分けられ、折図として保存されている。

海／藍か、山／草の汁と藤黄か〔図54・55〕、葉／草の汁と墨か、道／丹か、幹／丹か、城／朱か、川／藍か、村形(愛智郡)／藤黄か、村形(春日井郡)／藍か、村形(海西郡)／草の汁か、村形(海東郡)／丹か、村形(葉栗郡)／朱＋墨か



図54〔Ser.266 尾張国絵図〕
山部分

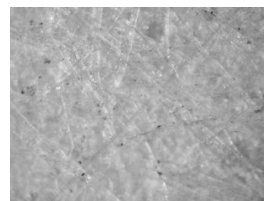


図55〔Ser.266 尾張国絵図〕
山部分顕微鏡写真

Ser.270 阿波国絵図〔図56〕

海／藍か、境界線／朱か、山／草の汁か、葉／墨と草の汁か、村形(勝浦郡)／丹か、村形(板野郡)／朱＋墨か、村形(名西郡)／藍か〔図

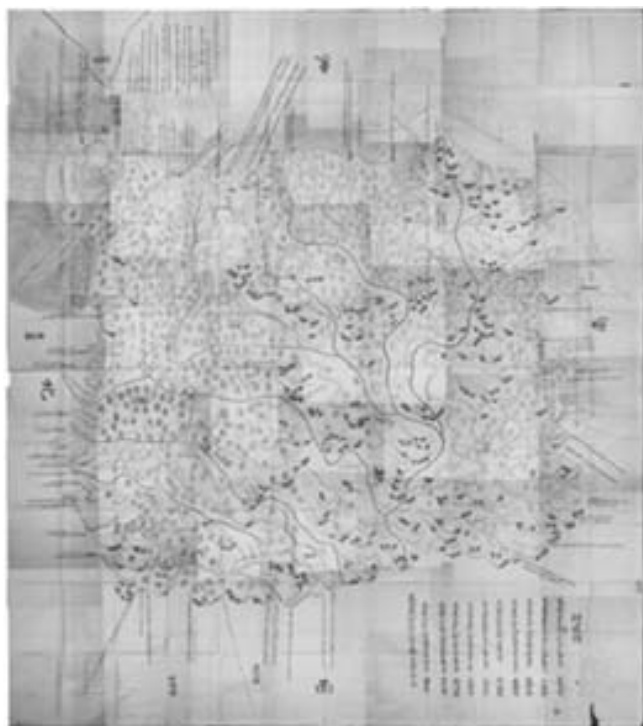


図56〔Ser.270 阿波国絵図〕

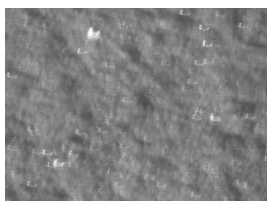


図60『Ser.267 参河国絵図』
橋頭顕微鏡写真

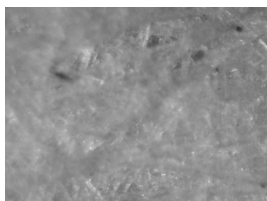


図62『Ser.267 参河国絵図』
山頭顕微鏡写真

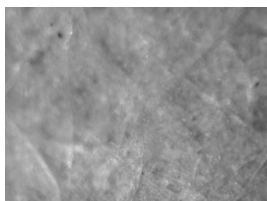


図64『Ser.267 参河国絵図』
村形(設余郡)部分顕微鏡写真

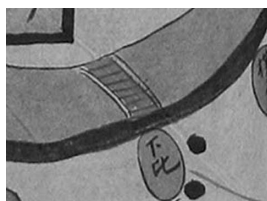


図59『Ser.267 参河国絵図』
橋部分

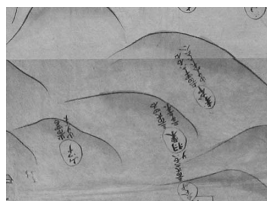


図61『Ser.267 参河国絵図』
山部分

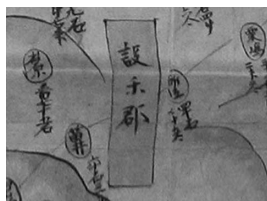


図63『Ser.267 参河国絵図』
村形(設余郡)部分

Ser.267 参河国絵図
海／藍か、橋／朱か(図59・60)、山／草の汁か(図61・62)、屋根／
ベンガラか、葉／草の汁と墨か、幹／ベンガラか、村形(幡豆郡)／朱

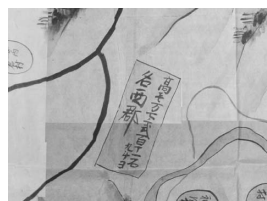


図57『Ser.270 阿波国絵図』
村形(名西郡)部分

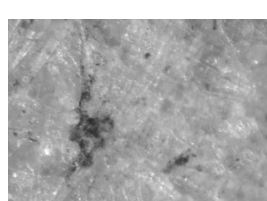


図58『Ser.270 阿波国絵図』
村形(名西郡)部分顕微鏡写真

57・58)、村形(名東郡)／朱+墨か、村形(阿波郡)／薄墨か、村形(麻
相郡)／墨か、村形(三好郡)／墨か、村形(巻馬郡)／朱+墨か

+墨+胡粉か、村形(碧海郡)／臙脂か、村形(加茂郡)／藤黄か、村形
(額田郡)／藤黄+胡粉か、村形(窪飯郡)／草の汁か、村形(設余郡)／
丹か(図63・64)、村形(八名郡)／藤黄+胡粉か、村形(渥美郡)／朱
+墨か
(二章執筆 村岡ゆかり)

三 ライデン大学所蔵袋付の刊行図について

袋——販売時の原形態

昨秋、ライデン大学図書館蔵「シーボルトコレクション」中の古地図
を見る機会を得て、袋付の刊行図の調査をおこなった。

シーボルトは、文政六年(一八二三)七月に来日し、いわゆる「シー
ボルト事件」で文政十二年(一八二九)十二月日本より追放される。し
かし、安政五年(一八五八)逐放令が撤去され、翌六年再来日し、文久
二年(一八六二)オランダへ帰国した。一八六六年ミュンヘンにて病没¹⁾。
つまり、シーボルトコレクションの地図は、収集期間が限定され、また
収集時の状態を保ってライデン大学に収蔵されていると推定される。言
い換えれば、日本国内で複数の所蔵者の手を経た地図と比べれば、元の
状態のまま残っていると考えられた。江戸時代に地図がどのような形で
売られていたのかは、不明な点が多い。もし販売時に袋が付いていたので
あれば、その袋も、ライデン大学では残っている可能性が高いわけである。

地図の袋について

書誌学では、本の袋を「書袋⁽²⁾」と呼んでおり、地図の袋も、本と同様
と思われる。「袋」といったが、様々な形がある。管見する限り、底が
つかない巻き紙状のもの(仮に「Aタイプ」と名づける)が大半である。
底がついた今と言う袋(「Bタイプ」)は少ない。他に、底だけでなく蓋

もついた、現在の封筒状のもの(「Cタイプ」)、さらに封筒状に蓋を止めるための紐がついたもの(「Dタイプ」)もある。また、折封の包紙(懸紙)もしくは畳紙の形態と表現すべき袋(「Eタイプ」)もある⁽³⁾。今回の調査では、Ser. 373・Ser. 374²以外は底のつかない巻き紙状の袋(Aタイプ)であった。

では、袋からなにがわかるのか。たとえば、(一)地図の名称、(二)著者・編者等、(三)発行書林、(四)刊行年や発売年、(五)販売書林、(六)販売価格などが判明する事がある。地図本体に記載されている事もあるが、それを補足する情報が袋に書かれている場合がある。

本調査を例に取れば、Ser. 373や374²は、題箋(外題)や内題がついていないが、袋には題名がつけられているので、地図名が解る。またSer. 31Bや32Eの様に、袋名と、題箋や内題が異なる場合もある。袋には、この様に古地図研究上の貴重な情報が記載されているのだが、袋付刊行古地図の残存数が少ない事その原因であるが、従来さほど重視されてこなかった。

シーボルトコレクション中の袋付刊行図

紙面が限られているので、特記する古地図のみ紹介する。基本的な調査データは、表3(本論文末尾)を参照のこと。

●Ser. 330 「濱町神田日本橋北之圖 全(題箋名)」

まず、ライデン大学ではどのような状態で収蔵されているのかを説明する。この地図は江戸切絵図のひとつで、同シリーズでは他に四点が袋付で収蔵されている。札入れ状の外帙(図一)に入れられ、蓋うら(図二)には所蔵番号・地図名(日本語とローマ字)・解説文(オランダ語)の紙が貼り付けられている。この外帙は、「ボール紙」と呼ばれる斑入り文様紙が使われていて、ライデン大学で眺めたと考えられる。地図本



図1 Ser.330 外帙



図2 Ser.330 蓋のうら

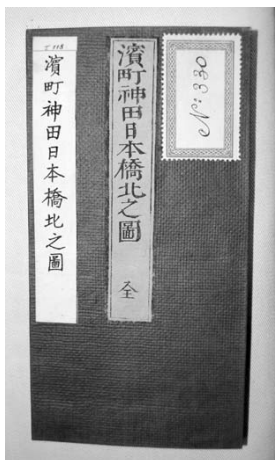


図3 Ser.330 おもて表紙

体には、青い厚紙のおもて表紙(図三)・うら表紙(図四)がついている。これらの青表紙自体は日本で刊行された時のものである。おもて表紙には、元題箋とライデン大学図書館の収蔵番号シールと地図名の名札が貼り付けられている。一方うら表紙には、地図名等基本項目がカタカナで墨書された紙が貼られている。これらは、ライデン大学で整理する

際につけられたと考えられる。袋(図六)は、Aタイプの巻き紙状、木版。うら(図五)には、ライデン大学図書館印が押されている。地図本体は、木版刷彩。

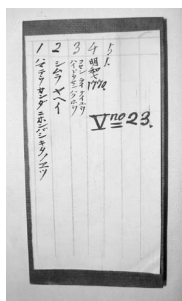


図4 Ser.330 うら表紙



図5 Ser.330 袋のうら



図6 Ser.330 袋のおもて

●Ser. 321B 「明治四年未年改正東京大繪圖(題箋名)」

地図おもてにライデン国立民族学博物館印が二ヶ所とライデン大学図

書館印一ヶ所。袋はAタイプ。地図も袋も木版刷彩。この地図は、刊行年から判断して、シーボルト自身の収集品ではない。シーボルトの二人の息子は、明治五年(一八七二)に来日している⁽⁵⁾ので、息子たちの収集にかかるとはあろう。

●Ser. 350 「萬壽大阪細見圖(題箋名)」

地図おもてに図書館印二ヶ所。袋はAタイプ。地図も袋も木版刷彩。袋の上部余白部分にアルファベットの書込みがある。インクが褪色している、判読が困難であるが、「1868」の年号らしきものは、読み取れる。これが、収集年であるなら、刊行年の事も合わせて、シーボルト自身の収集品とは考えられない。息子たち、特に長男アレクサンダー⁽⁶⁾の収集の可能性が大であらう。

●Ser. 373 「東海道名所一覽(袋名)」

地図おもてにシーボルト印と図書館印。地図も袋も木版刷彩。本来はEタイプの袋であるが、変更されている。地図名等が刷られた部分を切り取り、別紙に貼り付けている(図七)。また、本来は地図を包みこんだ場合に裏にあたる位置にくる「木曾街道名所一覽」の刊行予告が、別紙の裏面に貼り付けられている(図八)。



図7 Ser.373 別紙に貼られた「袋のおもて」



図8 Ser.373 別紙を開いた状態の時のうら面

改変前のEタイプの袋の状態と比較するため、神戸市立博物館所蔵の同地図と「木曾路名所一覽」の袋の写真を図版として載せる。(図九)は袋のおもて側、(図十)はうら側。(図十一)は「東海道名所一覽」の袋を、開いた状態である。

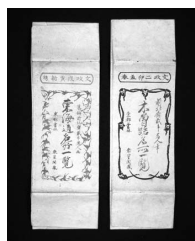


図9 袋のおもて



図10 袋のうら



図11 袋を開いた状態

●Ser. 374-2 「木曾路名所一覽」(袋名)
地図おもてに図書館印。地図も袋も木版刷彩。袋はEタイプ。刊行予告では、「木曾街道名所一覽」であるが、実際に発行された時の袋名は異なっている。

●Ser. 400 「高野山細見大畫圖」(題箋名)
地図は木版、袋は朱刷。地図おもてにシーボルト印と図書館印。題箋と袋名は一致するが、内題は両者とは異なる。

以上簡単ではあるが、ライデン大学での調査報告とする。地図本体に記載された書林名等の情報と、袋に書かれた情報とを比較検討する事が、今後の課題である。

〔註〕

(1) フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(一七九六～一八六六)。彼の経歴は『国史大辞典』第六卷(吉川弘文館、一九八五年)の項目説明による。

(2) 書袋。江戸時代中期以降、刊本を、木版印刷した巻き紙状の袋に入れて販売することがおこなわれた。江戸時代後期になると、店頭に並べた

ときに目立つ様に、多色刷りの美しい袋が多くなった。(参考：川瀬一馬著『日本書誌学用語辞典』(雄松堂出版、一九八二年)。井上宗雄・他編『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店、一九九九年)。)
地図の販売も、版本同様かと思われる。

(3) 神戸市立博物館蔵の古地図の袋について、別稿で紹介する予定である。

(4) 草板紙・馬糞紙とも呼ばれる。(参考：註(2)の文献)
日本においても、ボール紙を表紙に使う洋装本は江戸時代末期から輸入されていた。そして、明治十年前後から二十年代前半にボール紙本は急激に普及する。「木戸雄一『明治期『ボール表紙本』の誕生』(臨川書店、『明治の出版文化』、二〇〇二年に所収)」

(5) 長男アレクサンダー(一八四六～一九一一)は、再来日。次男ヘンリッヒ(一八五二～一九〇八)は、一時帰欧した兄に同行して再来日する。
〔参考：註(1)の文献〕

(6) アレクサンダーは、再来日した父と共に、安政六年(一八五九)初来日。父親の離日後も残り、文久二年(一八六二)から明治三年(一八七〇)まで駐日イギリス公使館勤務。その後も日本で役職に就く。(参考：註(1)の文献)

〔図版の資料名・所蔵者〕

(図一)～(図六) Ser. 380 「濱町神田日本橋北之圖 全(題箋名)」(ライデン大学図書館蔵 シーボルトコレクション)

(図七)～(図八) Ser. 373 「東海道名所一覽」(袋名)(ライデン大学図書館蔵 シーボルトコレクション)

(図九)～(図十) 葛飾北斎「東海道名所一覽」(袋名)「左」・「木曾路名所一覽」(袋名)「右」(神戸市立博物館蔵 南波松太郎コレクション)

(図十一) 葛飾北斎「東海道名所一覽」(袋名)(神戸市立博物館蔵 南波松太郎コレクション)

(三) 章執筆 国木田明子)

四 ライデンの国立民族学博物館所蔵『大日本諸国名産紙集』 について

料紙についての研究史と本章の課題

古文書の料紙に関する研究が、主として古文書学の分野において進展している。

富田正弘氏を中心とする研究グループは、平安から戦国期にわたる中世文書を研究対象とし、文書料紙の表面観察を徹底して行った。これは、使用された漉簀を判断するために、簀の太さ、一寸(三、〇三センチメートル)当りの簀の本数、糸目の幅寸法、紗目の有無、それらの目立ち具合を観察している。次に漉き上げた紙の乾燥方法を見るために板目、刷毛目を観察している。次に抄紙技術の優劣を判断のために、漉斑・漉皺の有無、繊維束・繊維溜りの有無、樹皮片等の異物を観察している。次に原材料の判断のために顕微鏡を用いて、繊維の太さ、密着の度合いを非破壊で観察している。この観察方法は、料紙調査の基準となり、この後に行われていく料紙の調査に影響を与えている。さらに文献史料に記されている文書料紙に関する記事を検討し、文書料紙の時代の変遷とその全体像を明らかにしている。⁽¹⁾

保立道久氏を中心とする研究グループは、禅宗寺院文書の古文書学的研究として、大徳寺文書の文書料紙を研究対象とし、富田氏の打ち出した文書料紙の表面観察方法を踏襲し、これに填料米粉(デンブ)の有無、非繊維物質の相対量を調査項目に加えて分析を行い、特に中世文書の中核をなす楮紙の分類を行っている。また、製紙科学の研究者の協力を得て、ベータ線地合測定装置・ソフトX線装置・レーザ顕微鏡を用いて簀の目の見え方のメカニズムを、透過光画像をフーリエ変換して簀の目数の計測を行っている。顕微鏡画像をフーリエ変換して繊維配向性の

相違により料紙の表裏の分析が可能であることを明らかにしている。⁽²⁾

また富田氏を中心とする研究グループは、前科研の研究成果を展覧させ中世から近世へ移行する際の文書料紙の変化、典籍・聖教・絵図との関係、中国・朝鮮との相違を課題として非破壊による総合調査によって料紙研究を行っている。前科研と異なる点は、顕微鏡を用いた透過光観察、非繊維物質の残存状況、米粉・白土等の填料の有無及び分量の観察、料紙加工の確認のための観察を追加していることである。⁽³⁾

一方、国立民族学博物館が所蔵しているシーボルトコレクションの中にある『大日本諸国名産紙集』は、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトが収集した江戸後期の紙であり、初な状態で伝存している貴重な史料である。この史料については、久米康生氏が国立民族学博物館において『大日本諸国名産紙集』に記されている産地と紙名をまとめ、⁽⁴⁾さらに稲葉政満氏を中心となって、スキャナにより画像を取得し、フーリエ変換して簀の目数の計測を行い、透過光での画像取得の場合は、簀の目の他、糸目、未叩解繊維の状態、刷毛目が、反射光での画像取得の場合は、板目などの凹凸が明瞭に観察することが可能であることを証明している。また色差計を用いて変色の度合いを計測している。⁽⁵⁾

このように、『大日本諸国名産紙集』の産地名・紙の名称・紙の構造といった紙の研究は進んでいるが、日本近世における紙の分類には言及されていない。富田氏を中心とする研究グループによる中世から近世へ移行する際の文書料紙の変化の考察をみるに、日本の近世における紙は、中世の紙を継承し、さらに地方へ伝播して発展したものと思われ、⁽⁶⁾大きな分類は可能であると思われる。

また保立氏を中心とする研究グループの繊維の洗浄の度合い、地合、不純物や填料の有無を基準とした料紙の分類は、有効であると思われる。そこで本稿は、国立民族学博物館が所蔵しているシーボルトコレクション

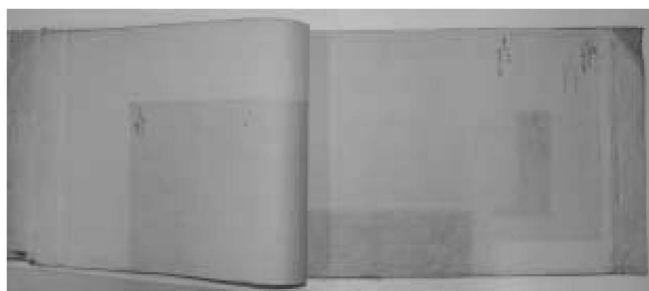
ンの中にある『大日本諸国名産紙集』を現地で閲覧し、非破壊による表面観察と顕微鏡観察を行い、調査結果をもとに料紙の分類を試みたものである。

『大日本諸国名産紙集』の書誌的考察

まず、本論に入る前に『大日本諸国名産紙集』の書誌的説明を加えておくこととする（下記図版・口絵6）。

『大日本諸国名産紙集』の装丁は、浅葱色の唐紙（模様は擦れによって見にくく不明）を萌黄色の糸で四つ目綴じしている。寸法は、縦34.8センチ、横53.0センチである。綴じ穴を天から①②③④とすると、①と④の穴は、天（地）と背側に2回糸を回している。綴じ穴の位置は、背から綴じ穴が1.5センチ、天（地）の際から①（④）の穴が2.4センチ、①と②、②と③、③と④の穴はそれぞれ同寸法で10.0センチである。表紙には、「大日本諸国名産紙集（ルビで、タイニッポンシヨクメイサンカミアツメとある。）於大坂ノ購之」と書かれた題簽（寸法は縦29.0センチ、横4.4センチ）が表紙の左側に張り込まれている。また、表紙右隅に「V C 61」と記されたラベルがあるが、文字が逆さまに貼り付けられている。

日本では、綴じが右側にくるが、西洋では綴じが左側に来る。したがって、ラベルはオランダにおいて、題簽は無視して綴じを左側にし、ラベル貼ったため、文字が逆さまに貼り付けたものと思われる。



【図版】 1-3060 大日本諸国名産紙集（部分）



【図版】 1-3060 大日本諸国名産紙集
全体像（表紙）

所収されている紙は130点あり、綴じ込まれている。ただし現在38・39・40・63・75番目の紙が欠番となっている。間合紙に仮綴穴の痕跡があり、ある時期まで紙縫りで仮綴されていたものと思われる。おそらく仮綴の時点で、上記の5紙は何らかの理由で離され、欠落したのではないかと思われる。凡そ各紙に番号・産地名・紙の名称が記されている。番号は主に漢数字で、産地名・紙の名称はカタカナで表記されている。別保存で紙が束の状態で保存されており、そのほとんどに帯が付され、その帯に「百番 豫州松山産 奉書」「百拾貳番 土佐産 小枕」「六十七番 越州大虫産 小高檀紙」等と記されている。⁽⁷⁾『大日本諸国名産紙集』の35番の紙に「卅五番 大坂産 金緞子揉紙」と記された带状のものが挟まれており、前述の帯と同様である。帯に記された番号・産地名・紙の名称は、『大日本諸国名産紙集』に記された番号・産地名・紙の名称と一致する。このことから『大日本諸国名産紙集』は、これら別保存さ

れている紙の束から1枚ずつ抜き取って作成されたものであると考えられる。⁸⁾現在『大日本諸国名産紙集』は見本帳と考えられているが、⁹⁾帯に記された番号・産地名・紙の名称は、『大日本諸国名産紙集』に記された番号・産地名・紙の名称と一致することから、一種の紙目録的機能をもっていたと思われる。

本の大きさよりも縦・横の寸法が大きい場合は、本の大きさに切り揃えることなく、表紙の大きさに折り込んでいる(口絵6)。

繊維判定の状況について

古文書や絵図等の歴史史料(史料)の多くは、紙に書かれており、その種類は様々である。

料紙は、まず主として楮・雁皮(雁斐)・三椏に分類することができ

る。繊維判定の分析方法については、原本史料は文化財であり、破壊検査は絶対に行わなければならない。ここで採用する料紙の調査方法は、非破壊による目視観察と顕微鏡による繊維観察である。但しこれらの観察を行う際、判定方法に共通認識を持たせなければならない。そこで、製紙技術研究の専門家で、長年に亘って文化財の分析に従事された元高知県紙産業技術センターの大川昭典氏が、料紙の判定するための基礎知識¹⁰⁾を提示されている。また富田正弘氏が、料紙の判定法を提案している¹¹⁾ので、合わせてここに提示する。

大川氏による判別方法は以下の通りである。

楮・雁皮(雁斐)・三椏繊維の判別について、

① 楮

繊維が雁皮(雁斐)や三椏に比べて太く長い。繊維の幅には狭いものと広いものがあり、均一ではない。細かい繊維は先端が尖り、細

胞壁が厚い。広い繊維は先端が丸く細胞壁が薄い。形状は楕円形で、輪郭がはっきり見える。繊維と繊維の間隔が大きい。

② 雁皮(雁斐)

繊維が細やかで短く、均一である。繊維の先端は丸く、細胞壁は薄い。繊維に透明感がある。先端に向かって繊維の折り返しがあるものもある。形状は扁平な形状であり、非繊維細胞が多いため、繊維と繊維の間隔が密着して自然に詰まって見える。

③ 三椏

繊維は雁皮(雁斐)ほどではないが、比較的細い。繊維の中央部分が特に幅広く両端に向かって狭くなっている。繊維の先端は丸く、中には分岐しているものもある。繊維の折り返しはない。雁皮(雁斐)より膜壁が厚いので不透明感がある。繊維と繊維の間隔は、雁皮(雁斐)ほどではないが、楮に比べて多少密着している。通常10%程度の柔細胞を含んでいる。柔細胞は長円形と円形のものがあり、ヘミセルロースに富んでいて、乾燥によって潰れて広い面積をとっている。

である。填料としてデンプンが混合されている場合、デンプンは、粒子が丸くて、大きさが揃っていて、固まって散在している。粒子の大きさは、紙繊維幅の2分の1から3分の1位である。このデンプンは米粉(米糊)であり、その使用例が多い。

填料として白土が混合されている場合、白土は、粒子の大きさがまちまちで、デンプンよりも不透明で形が丸くなく一定ではない。特に雁皮(雁斐)に白土を配合する場合は、粒子が細やかでないと紙の表面に現れるためデンプン粒子よりも細かいものである。

填料を配合することによる効果について、

- ① 不透明度を高くし、薄くても透けない。
- ② 白色を正確に発光することが可能である。
- ③ 繊維間の空間を埋めるため、平滑度が増す。
- ④ 繊維同士の接触を妨害するため、繊維間結合が緩められ、繊維間に空間が多くできる。このため多湿時に繊維が膨らんでも空間で膨らみが吸収されるので、紙の収縮が少なくなつて柔らかな紙になる。
- ⑤ 繊維間の空隙が少なくなるため、にじみが少なくなる。
- ⑥ 胡粉に含まれる炭酸カルシウムは、紙を弱アルカリ性に保つため、紙の保存に役立つ。

白土は、虫害防止・耐火性・耐熱性・変色防止等の効果がある。

富田氏による材質別紙種―楮・雁皮(雁斐)・三桎の判定法は、以下の通りである。

繊維の長さは、楮が6〜21mm、雁皮(雁斐)が3〜5mm、三桎が3〜5mmである。

繊維の太さは、平均で楮が27 μ m、雁皮(雁斐)が19 μ m、三桎が20 μ mである。楮繊維が最も太く、ついで三桎、雁皮(雁斐)の順に細くなる。

簀の目の見え方から、よく目立つのが三桎、少し目立つのが楮、簀の目が見えずに紗の目が見えるのが雁皮(雁斐)である。

紙表面の光沢度・透明度から、楮は繊維の密度が低く、繊維間に間隙があるので、光沢度は低く、不透明で、柔らかい。雁皮(雁斐)は密度が高く、繊維が密集しているため、光沢度が高く、透明感があり、パリパリして硬い。三桎はその中間である。

写経料紙のうち、光沢度が高く、透明感があり、パリパリして硬いながら、少し簀の目が見えるものは、楮紙の打紙であり、顕微鏡で観察すると繊維が太く、押し潰されて繊維間の間隙がなくなつて見える。

『大日本諸国名産紙集』の分析について

『大日本諸国名産紙集』に収録された料紙は、江戸後期に漉かれた紙が初な状態で保存されたものである。130点のうち、33点がジョーシユ(城州・山城)、ヲーサカ(大坂)、エド(江戸)、セツシユ(摂州・摂津)、ミノ(美濃)、エチゼン(越前)、アワ(阿波)を産地とする表具紙と呼ばれる染紙や唐紙・金緞子紙・更紗紙などの加工紙である。残りは西国を中心とした未加工の素紙である。今回は、史料に用いられる素紙を分類対象とし、染紙などの加工紙は除外した。

前述の判定法を基に、紙一点一点を目視観察および顕微鏡による非破壊観察を行ったところ、一覧表に示した結果となつた(表4を参照)。

本章では、『大日本諸国名産紙集』に収録されている楮紙・雁斐紙・三桎紙をさらに繊維の洗浄の度合い、地合、不純物や填料の有無を基準として、分類を試みた。とくに、楮紙については、填料の有無により以下の、①デンブンを填料とする楮紙、②白土・胡粉を填料とする楮紙、③填料を含まない楮紙に分類することができる。

1. 楮紙の分析と分類

まず、①デンブンを填料とするものとして、奉書紙が挙げられる。奉書紙は、その系譜として室町時代の杉原紙に繋がり、杉原紙の不純物を徹底して洗い流し、大量の米粉を填料として加えた料紙である。エツシユ(越州・越前)産68番ヲーホーシヨ(大奉書紙)、69番チユーホーシヨ(中奉書紙)、70番コホーシヨ(小奉書紙)、71番コゼンヒロホシヨ(御前広奉書)、アワ(阿波)産97番タケナガガミ(丈長紙)ゲイシユ(ヒロシマ(芸州広島)産85番ミヨシボシヨ(三次奉書)、ヨシユ(予州大洲)産99番ホーシヨ(奉書)、ヨシユ(予州新谷)産100番ホーシヨ(奉書)、ヨシユ(予州新谷)産

101番ホーシヨ（奉書）、トサ（土佐）産109番ホーシヨ（奉書）である。これらは、填料であるデンブンの量が多い。そのため紙面に緻密で、地合は良好である。塵やリゲニン・ペクチンなどの非繊維物質がほとんど見られないのである。

これらに類似した紙として、5番キョーハブタイ ジョーシユ（京羽二重 城州 山城）があり、この紙は、紙面の地合は普通であるが、塵はほとんど無い。ただし繊維束が多く見られる。

次に杉原紙が挙げられる。ゲイシユエヒロシマ（芸州広島）産83番チウスギハラ（中杉原）、チクセン（筑前）産122番チウスギハラ（中杉原）である。これらは、やや薄手の紙で簀の目が目立つ。紙面に繊維束が見られる。

ボウシユエワクニ（防州岩国）産86番ハンシ、88番ゴヨウカミ、89番カタヲリカミは、厚手ではあるが、簀の目が目立ち、紙面に繊維束が見受けられる。

室町時代から戦国時代の杉原紙の系統を引くといわれる¹³52番ニシノウチカミ ショーシユ（西の内紙 常州）があり、紙面の地合は、非常に良い。塵はほとんどない。繊維束も見られない。53番ホトムラカミ ショーシユ（程村紙 常州）は、西の内紙と同様である。

②胡粉・白土を填料とする楮紙として、ワシユエヨシノ（和州 吉野）産8番ノベカミ（延紙）、キシユ（紀州）産91番ノベカミ（延紙）、ワシユ（和州）産9番ウダ（宇陀）、ゲイシユエヒロシマ（芸州広島）産82番シロホ（白保）、84番コハンシ（小半紙）、チョーシユ（長州）産90番アツハンシ（厚半紙）、ゲイシユエヒロシマ（芸州広島）産80番モロクチ（諸口）が挙げられる。

③デンブンの填料を加えない又はほとんど含まない楮紙として、エツシユ（越州・越前）産65番ヲータカタンシ（大高檀紙）、66番チータ

カタンシ（中高檀紙）、67番シヨータカタンシ（小高檀紙）の高檀紙が挙げられる。これらは、中世の檀紙の系統を引くもので、紙面に独特の皺紋が人為的に入っているのが見られる。塵や非繊維物質などの不純物はよく取り除かれていて、繊維束もない。よく叩解されており、地合は美しいものである。

次に、美濃紙・石州紙・泉貨紙が挙げられる。ミノ（美濃）産54番ヲーナラシ（大直紙）、55番チユーナラシ（中直紙）、56番シヨインシ（書院紙）、57番コギク（小菊）、58番ミツヲリシヨテンシ（ママ）（三つ折書院紙）、59番フタツヲリシヨテンシ（ママ）（二つ折書院紙）、チクゴ（筑後）産123番ミノカミ（美濃紙）、セキシユ（石州）産74・76番ハンシ（半紙）、ヨシユエヨシダ（予州吉田）産102番センクワ（泉貨）、ヨシユエウハシマ（予州宇和島）産105番センクワ（泉貨）、ヨシユエラーツ（予州大洲）産107番センクワ（泉貨）、トサハタ（土佐幡多）産111番センクワ（泉貨）である。これらは、填料を含まずリゲニン・ペクチンなどの非繊維物質を含むもので、紙が強張り、硬さがある（バリバリ感がある）。美濃産のものは地合が良好である。筑後産のものは地合が良好であるが少し繊維束を含んでいる。繊維長が美濃産のものに比べて長い。塵を少し含むものである。石州紙は地合が普通で繊維束を含んでいる。泉貨紙は、厚手で地合も良好で塵もほとんど見られないのである。

これらに類似した紙として、アワ（阿波）産93番ホンゴクサラシカミ、アワスモト（阿波洲本）産94番チウゴクサラシカミ、ブゼン（豊前）産117番ハンキリ（半切紙）、118番ハンシ（半紙）、チクセン（筑前）産120番ハンキリ（半切紙）、121番ハンシ（半紙）、ヒシユ（肥州・肥後）産124番ロクスンハンキリ（六寸半切紙）、ヒウカタカオカ（日向高岡）産127番ハンキリ（半切紙）、128番ロクスンハンキリ（六寸半切紙）がある。

これらは、填料を含まずリゲニン・ペクチンなどの非繊維物質を含む

ので、地合が普通で、繊維長が長く繊維束を含んでいる。塵はほとんどない。トサシモタ（土佐下田）産110番ラーハンシ、トサ（土佐）産114番ハンシは、繊維がやや短いだけでほぼ同様のものである。

2. 雁皮（雁斐）紙の分析と分類

セツシユ（摂州・摂津）産24番ウスヨーチューヨー（薄様中葉）は、やや薄手のものではあるが、簀の目がほとんど目立たなく、光沢がある。繊維が細く繊維と繊維の間隔が詰まっていて、密度が高いものである。

トサ（土佐）産116番ホンヤクタイシ（本葉袋紙）は、簀の目がほとんど目立たなく、光沢がある。刷毛目・板目が見受けられる。繊維が細く繊維と繊維の間隔が詰まっていて、密度が高い。厚みがあるため厚葉にあたる。

セツシユ（摂州・摂津）産15番ハナイロマニヤイ（縹色間似合紙）は、藍色に染まった繊維と染まっていない繊維が混じり合っている。16番アサキマニヤイ（浅葱間似合紙）は少量の藍色に染まった繊維と染まっていない繊維が混じり合っている。17番チャマニヤイ（茶間似合紙）は、地が白色と茶色の繊維に黄色の粒子が付着している。若干青色の繊維も見られる。18番キマニヤイ（黄間似合紙）は、黄色の粒子が多く付着している。19番シロマニヤイ（白間似合紙）は、繊維が白い粒子で固められているように見える。20番子ツミマニヤイ（鼠間似合紙）は、繊維が白い粒子で固められた上に黒い粒子が混じって見える。21番タマゴマニヤイ（卵間似合紙）は、黄色の粒子に若干の白い粒子が混じって見える。22番チリマニヤイ（塵間似合紙）は、チリが多く、黄色の粒子、灰色の粒子、白の粒子などが混在して見える。23番フルテマニヤイ（古手間似合紙）は、黄色・灰色・白色・黒色の粒子と若干の藍色の繊維が混在して見える。エチゼン（越前）産73番キマニヤイ（黄間似合紙）は、繊維

が白い粒子で固められている上に黄色の粒子がのっているように見える。セツシユ（摂州・摂津）、エチゼン（越前）産の間似合紙は、紗漉で布目が目視できる。また填料には泥が用いられている。

3. 三椋紙の分析

スルカ（駿河）産47番・48番ハンシ（半紙）は、簀の目・糸目が紙の表側に見えるが裏側から見ることができない。やや光沢がある。雁斐ほどではないが、繊維が細く繊維と繊維の間隔が詰まっていて、密度がやや高いものである。

「大日本諸国名産紙集」所収料紙の漉簀について

— 簀の種類と数値からの分析

加藤雅人・稲葉政満氏は、国立民族学博物館所蔵の「大日本諸国名産紙集」所収の料紙とこれに対応する料紙の簀の目を画像解析し、得られた簀の目のデータを統計的に処理し、漉簀と原料の関係については、楮紙は平均3 cm当り23.1本、雁皮（雁斐）紙は平均3 cm当り27.7本で、一般に雁皮（雁斐）繊維は細かいため、目の粗い簀ではすくい上げることが困難であるため、雁斐を漉く場合にはより目の細かい簀が使用されていること、厚さとの関係では、楮紙で紗を敷かず漉いた料紙を対象に検討を行っており、目の細かい簀では薄い紙を漉き、目の粗い簀では比較的多様な厚さの紙を漉いていること、簀の目の粗さと産地の関係では、楮紙を対象に、試料数の多い伊予・越前・周防・土佐・美濃の地域を比較検討しており、漉簀の簀の目数に地域差があること、上記原料との関係と同様に繊維の粗さに応じて簀の目の本数が異なることを指摘している⁽¹⁵⁾。

ただし同紙種での比較は行われていない。したがってここでは、デン

ブンを含む奉書紙の簀の種類と3 cm当りの本数、糸目幅について検討を試みたものである。

奉書紙の簀の種類と3 cm当りの本数、糸目幅をみると表1にまとめることができる。

厚さは、0.1 mmから0.2 mm以上のもので、様々である。

簀の種類はすべて竹である。

3 cm当りの本数は21〜26本（平均24本）である。

糸目幅は30〜33 mmである。

また料紙の厚さと3 cm当りの本数、糸目幅をみると、68番ヲーホーショーシ（大奉書紙）、69番チューホーショーシ（中奉書紙）、71番コゼンヒロホショー（御前広奉書）、97番タケナガガミ（丈長紙）は、0.2 mm以上のものであるが、71番コゼンヒロホショー（御前広奉書）、97番タケナガガミ（丈長紙）は、幅の広い紙である。この条件で類別してみると、大奉書紙と中奉書紙の3 cm当り簀の本数と糸目幅にはほとんど差は無い。御前広奉書と丈長紙も同様である。また地域は異なるが、厚さが同様のエッシュー（越州・越前）産70番コホーショーシ（小奉書紙）、ゲイッシューヒロシマ（芸州広島）産85番ミヨシボーショー（三次奉書）、ヨッシューマツヤマ（予州松山）産100番ホーショー（奉書）は3 cm当り簀の本数と糸目幅にはほとんど差は無い。ヨッシューラーツ（予州大洲）産99番ホーショー（奉書）、ヨッシューシクタニ（予州新谷）産101番ホーショー（奉書）、トサ（土佐）産109番ホーショー（奉書）も同様である。このことから料紙の厚みと3 cm当り簀の本数と糸目幅には関連性があると考えられる。

四章のまとめ

以上、国立民族学博物館所蔵『大日本諸国名産紙集』を検討してきた。

表 1

番号	産地名	紙名	厚さ/ μ m	漉簀の種類	簀の目の 本数/3cm-1	糸目幅/mm
68	エッシュー	ヲーホーショーシ	260	竹	24	30
69	エッシュー	チューホーショーシ	230	竹	26	31
70	エッシュー	コホーシューカミ	170	竹	26	30
71	エチゼン	コゼンヒロホーシュー	270	竹	21	30
85	ゲイッシューヒロシマ	ミヨシボーショー	160	竹	24	32
97	アワ	タケナガガミ	220	竹	23	31
99	ヨッシューラーツ	ホーショー	100	竹	24	33
100	ヨッシューマツヤマ	ホーショー	170	竹	26	32
101	ヨッシューシクタニ	ホーショー	120	竹	24	33
109	トサ	ホーショー	130	竹	23	33

(1) とくに楮紙はデンプンの有無、白土・胡粉を填料とした場合、以下のように分類できる。

- ① デンプンを填料とする紙として奉書・杉原紙等ある。
- ② 白土・胡粉を填料とする紙として吉野延紙、紀州延紙、芸州広島白保紙・諸口紙等がある。

③ 填料(デンプン等)を含まない楮紙として、檀紙・美濃紙・石州紙・泉貨紙等がある。

さらに③の填料(デンプン等)を含まない楮紙は、塵やリグニン・ペクチンなどの非繊維物質などの不純物の有無、地合、繊維束の有無によりさらに分類することができる。

デンプンを填料とする紙は中世の杉原紙の系譜を引く紙であり、填料(デンプン)を含まない楮紙は中世の檀紙・美濃紙の系譜を引く紙と思われる。

(2) 『大日本諸国名産紙集』所収の奉書紙を質の種類と数値から見ると、紙の厚みと質の種類・3cm当り質の本数・糸目幅には関連性があると考えられる。

まだ一試論過ぎないが、今後この切り口でデータ解析を行ない、多くのデータを集積することが有効であると思われる。

〔註〕

- (1) 富田正弘(研究代表者)『古文書料紙原本にみる材質の地域的特質・時代的変遷に関する基礎的研究 平成六年度科学研究費補助金研究成果報告書』(平成七年三月) 湯山賢一編『文化財学の課題 和紙文化の継承』(勉誠出版 二〇〇六年四月発行)
- (2) 保立道久(研究代表者)『禅宗寺院文書の古文書学的研究 二〇〇二年度～二〇〇四年度科学研究費補助金研究成果報告書』(二〇〇五年三月)
- (3) 富田正弘(研究代表者)『紙素材文化財(文書・典籍・聖教・絵図)の年

代推定に関する基礎的研究 平成十五年度～平成十七年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書』(平成二十年三月)

- (4) 久米康生「シーボルトと和紙」『百万塔』(68)(一九八七年)
- (5) 稲葉政満(研究代表者)『江戸のモノづくり ライデン国立民族学博物館所蔵 シーボルト和紙コレクションの紙質調査 科学研究費補助金研究成果報告書』(二〇〇六年三月)

(6) 註(3)前掲報告書

(7) 『シーボルト父子のみた日本 生誕200年記念』ドイツ―日本研究所(一九九六年二月) 掲載写真参照

(8) 註(7)前掲解説文

(9) 註(7)前掲解説文

(10) 大川昭典氏のご教示。及び註(3)前掲報告書 大川昭典「楮・三楮・雁皮繊維の鑑別」『文書料紙の填料の観察』

(11) 註(3)前掲報告書 富田正弘「紙素材文化財の料紙判定法について」

2. 材質別紙種の光学的判別法―楮紙・楮紙・斐紙

(12) 註(3)前掲報告書 富田正弘「紙素材文化財の料紙判定法について」

3. 楮紙製法別紙種の判定法―檀紙・杉原紙・奉書紙・美濃紙等 (6) 奉書紙

(13) 註(12)前掲富田論文 3. 楮紙製法別紙種の判定法―檀紙・杉原紙・奉書紙・美濃紙等(3)杉原紙

(14) 註(12)前掲富田論文 3. 楮紙製法別紙種の判定法―檀紙・杉原紙・奉書紙・美濃紙等 (5)大高檀紙

(15) 註(5)前掲報告書 加藤雅人・稲葉政満「画像処理による紙の分析」

※ 本文中に記されている番号、カタカナ表記の名称については、原本に記されているものを用いた。

※ 一・四章は、『ライデン国立民族学博物館所蔵『大日本諸国名産紙集』調査報告書(科学研究費補助金・基盤研究(A)「地図史料学の構築 前近代地図データ集積・公開のために」代表杉本史子)』所収論文を加筆・訂正したものである。

下記の方々には、調査およびその準備にあたって貴重なご教示とご高配を
いただきました。お礼申し上げます。

ライデン大学図書館

国立民族学博物館

ライデン大学教授

国立民族学博物館

東京芸術大学大学院

W.J.Boot 博士
マテイ・フォラー博士
稲葉政満准教授

本稿は、科学研究費補助金・基盤(A)「地図史科学の構築―前近代地図
データ集積・公開のために」(代表・杉本史子)、同・基盤(B)「ライデン
大学シーボルト国絵図の地図史研究」(代表・小野寺淳)の研究成果の一部
である。

We wish to express our gratitude to Leiden University Library, Leiden
National Museum of Ethnology, Prof. Dr. Matthi Forrer, Prof. Dr. W. J.
Boot, and Prof. Dr. Masamitsu Inaba.

表 2

絵図番号	絵図	冊数	裏書き表題	表紙	表紙カタカナ 読み	絵図サイズ	折り返し (cm)	表紙寸法 (縦×横)
Ser.255	山城	1	山城國絵圖	有	未記入	158*240	2.8~3.0	30.7*20.5
Ser.258	大和	1	大和國絵圖	有	ヤマト※2	220*366	2.8~3.0	32.4*22.4
Ser.260	河内	1	河内國絵圖	有	未記入	136*275	2.6~2.7	24.2*18.2
Ser.262	和泉	1	和泉國絵圖	有	未記入	127*291	2.9~3.0	21.4*16.5
Ser.265	志摩	1	志摩國絵圖	有	シマ	127*90	1.7~1.8	23.2*16.3
Ser.266	尾張	2	尾張國絵圖	有	オワリ	246.5*404	2.5~2.7	26.8*22.1
Ser.267	三河	1	參河國絵圖	有	ミカハ	196*191	2.8~3.1	21.2*20.8
Ser.270	阿波	1	阿波國絵圖	剥離	アワ	300*280	3.0~3.4	31.9*23.3
Ser.271	近江	2	近江※1	剥離	アフミ	316*179	2.7~2.9	31.4*26.8
Ser.273	能登	1	能登國絵圖	有	ノト	148*345	2.7~3.0	21.5*19.5
Ser.275	佐渡	1	佐渡國絵圖	有	サド	212*294	3.0~3.8	25.3*19.0
Ser.277	丹後	1	丹後國絵圖	未撮影	未撮影	113.5*156	なし	14.8*20.1
Ser.280	因幡	1	因幡國絵圖	有	イナバ	136*151	2.8	19.8*17.6
Ser.281	伯耆	1	伯耆國絵圖	有	ホウキ	158.5*138.5	2.7	20.6*17.2
Ser.282	石見	3	石見國絵圖	剥離	イワミ	285*510	2.5~2.7	24*30
Ser.283	隠岐	1				114.5*93.5		
Ser.284	播磨	1	播磨國絵圖	剥離	(破れ)	219*231.5	2.6~2.8	23*21.8
Ser.287	美作	1	美作國絵圖	剥離	ミノ	249*361.5	2.6~2.8	32*23
Ser.288	備前	1	備前國絵圖	有	ビゼン	223*186.5	2.8~3.0	25.4*22.7
Ser.289	備中	1	備中國絵圖	有	ビツチウ	189*207	2.8~3.0	26.4*20.0
Ser.290	淡路	1	淡路國絵圖	有	アワジ※3	186*256	2.9~3.0	22.3*19.5

作成：橋本暁子

※1 裏書き表題部は撮影されていないため、「近江」以降は判読不可能

※2 左上のラベルはないが、中央のラベルに小文字で表記されている

※3 左上のラベルには「アワジ」、中央のラベルには「アワヂ」と表記

刊行年	年代 (西暦)	大きさ(紙) (cm)	大きさ(枠) (cm)	印刷種別	点数	地図に押され た印	袋に押された 印	袋寸法 (cm)
寛延元年	1748	117.2×128.4	枠なし	木版	1	図(裏)、シ (表)、博(表)	なし	袋寸法 27.9×19.6
天明7年	1787	82.4×101.9	80.2×100.6 (枠幅0.3)	木版	1	図(裏)、 シ(表・裏)	なし	袋寸法 27.8×17.7
文化14年	1817	44.8×58.6	43.2×57.4 (枠幅0.1)	木版 袋は木版刷彩	1	図(裏)、 シ(表・裏)	なし	袋寸法 14.4×10.2
寛政9年	1797	79.2×87.0	76.8×85.8 (枠幅0.2)	木版刷彩	1	図(裏)、 シ(表)	図(表)、シ (表)	袋寸法 19.8×11.4
明治4年	1871	147.8×180.4 継足し 35.0×22.4	145.4×178.4(枠 幅0.1~0.2)継足 し32.0×22.0	木版刷彩	1	図(表)、 博(表)	図(表)、博 (表)	袋寸法 24.8×19.4
安政補益 再校	1854~ 1860	69.0×91.8 継足し 10.4×33.8	55.5×86.3(枠幅 0.2) 継足し14.2×30.2	木版刷彩	1	図(裏)	図(裏)	袋寸法 17.1×11.8
明和4年	1767	47.7×64.6	45.8×63.8 (枠幅0.2)	木版刷彩 袋は木版	1	図(表)、 シ(表)	図(表)、シ (表)	袋寸法 15.7×8.6
明和7年	1770	47.6×64.6	43.8×61.7 (枠幅0.2)	木版刷彩 袋は木版	1	図(表)、 シ(表)	図(裏)	袋寸法 15.9×8.1
宝暦9年	1759	47.6×64.6	44.2×62.6 (枠幅0.2)	木版刷彩 袋は木版	1	図(表)、 シ(表)	図(裏)	袋寸法 15.8×8.4
明和7年	1770	47.5×64.2	42.8×62.5 (枠幅0.1~0.2)	木版刷彩 袋は木版	1	図(表)、 シ(表・裏)	図(裏)	袋寸法 15.8×8.6
明和3年	1766	47.6×64.1	42.4×59.5 (枠幅0.2)	木版刷彩 袋は木版	1	図(表)、 シ(表)	図(裏)	袋寸法 15.9×8.6
安永4年	1774	47.6×64.4	41.4×59.0 (枠幅0.3)	木版刷彩	1	図(表)、 シ(表)	袋はついてい ない	袋はついてい ない
文久3年	1863	47.3×70.5 継足し 12.3×17.0	46.0×86.2 (枠幅0.2)	木版刷彩	1	なし	なし	袋寸法 17.8×12.5
文政元年	1818	43.3×58.0	枠なし	木版刷彩	1	図(表)、 シ(表)	なし(袋は改 変されている)	袋は元の状態 とは違い、加 変されている
文政元年	1818	43.3×58.0	枠なし	木版刷彩	2 輔 一組	図(表)	袋はついてい ない	袋はついてい ない
文政2年	1819	43.7×56.6	枠なし	木版刷彩		図(表)	なし	袋寸法 45.1×15.5
天明4年	1784	120.5×54.0	115.8×52.2 (枠幅0.3)	木版 袋は朱刷	1	図(表)、 シ(表)	なし	袋寸法 24.3×15.4
文政5年	1823	30.4×101.1	二重枠 (枠幅0.1~0.15)	木版両面刷り	両面 刷り 1	図(道中図側)、 シ(道中図の 裏)	図(表)	袋寸法 15.0×8.0
文政6年	1823	40.6×28.2	二重枠 37.4×23.5	木版刷彩 袋は木版	1	図(表)、 シ(表)	なし	袋寸法 15.3×7.7
				註2 地図と 袋の印刷法が 違う場合は、 袋は~と記載。		註3 図は、ライデン大学 図書館印。シは、シーボル ト印。博は、ライデン国立 民族学博物館印の略。		

表 3

No.	整理番号	図名(題箋名)	図名(内題)	図名(袋の図名)	作者等	書林
1	Ser. 264	摂津國名所大繪圖	なし	摂津國名所大繪圖		木村壽陽堂(京都)
2	Ser. 279	但馬國大繪圖	なし	名所細見但馬國大繪圖	篠崎応道	前川六左衛門(江戸)
3	Ser. 312	新改内裏図	なし	新改内裏図		林喜兵衛(京都)・林吉永(京都)・野田藤八(京都)
4	Ser. 319	再版新改御江戸繪圖	なし	再版新改御江戸繪圖		西村屋与八(江戸)・西村宗七(江戸)
5	Ser. 321B	明治四年未年改正東京大繪圖	なし	宦版 東京大繪圖		吉田屋文三郎(東京)
6	Ser. 322	泰平御江戸繪圖	なし	泰平御江戸繪圖	高井蘭山(校訂)	和泉屋市兵衛(江戸)・岡田屋嘉七(江戸)・鶴屋喜右衛門(江戸)
7	Ser. 325	下谷淺草邊之圖全	下谷淺草繪圖	下谷淺草邊之繪圖	吉田如流・瀨名貞雄子狐阡(図書)	北畠氏(江戸)・吉文字屋治郎兵衛(江戸)
8	Ser. 326	谷中本郷丸山小石川邊之圖	本郷谷中小石川丸山繪圖	谷中本郷丸山小石川邊之*繪圖	米山鼎峨(書)	北畑氏(江戸)・吉文字屋次郎兵衛(江戸)
9	Ser. 328	永田町之繪圖	永田學繪圖	東都永田町之繪圖	瀨名貞雄子狐阡(図書)	北畑氏(江戸)・吉文字屋治郎兵衛(江戸)
10	Ser. 330	濱町神田日本橋北之圖 全	神田濱町日本橋北圖	濱町神田日本橋北之繪圖	狐阡瀨貞雄・梅道川伯豊(図書)	北畑氏(江戸)・志村弥次兵衛(江戸)
11	Ser.331	芝愛宕下邊之圖全	芝愛宕下繪圖	芝愛宕之下邊之*繪圖	瀨名貞雄子狐阡(図書)	北畑氏(江戸)・吉文字屋治郎兵衛(江戸)
12	Ser. 332	築地八町堀日本橋南之圖 全	築地八町堀日本橋南繪圖	袋はついていない	米山鼎峨(筆者)	北畑氏(江戸)・吉文字屋次郎兵衛(江戸)
13	Ser. 350	萬壽大阪細見圖	なし	萬壽大阪細見圖		伊丹屋善兵衛(大阪)・河内屋太助(大阪)
14	Ser. 373	なし	なし	東海道名所一覽(袋は改変されている)	葛飾北斎	高山房・千鐘房・衆星閣
15	Ser. 374-1 (Ser.373と同版地図)	なし	なし	袋はついていない	葛飾北斎	高山房・千鐘房・衆星閣
16	Ser. 374-2	なし	なし	木曾路名所一覽	葛飾北斎	文金堂・千鐘房・衆星堂
17	Ser. 400	高野山細見大畫圖	紀州高野山金剛峯寺細見図	高野山細見大畫圖	橘国雄(図)	村上勘兵衛(京都)・北村四郎兵衛(京都)・辻文助(大坂)・志貴理兵衛(大坂)
18	Ser. 404	なし	大増補道中独案内圖	大増補道中独案内圖		吉文字屋市左衛門(大坂)・須原屋平助(江戸)・永楽屋東四郎(名古屋)・菊屋喜兵衛(京都)
19	Ser. 416	なし	日光驛路里数之表	日光驛路里数之表		泰西堂
				註1 「之*」は「之」の異体字を示す		

横寸法/ mm	厚さ/ μm	密度	澁篋の 種類	篋の目の本 数/3cm-1	糸目幅/ mm	備考 1	備考 2	備考 3
								算用数字 3 とあり
								算用数字 2 とあり
								算用数字 4 とあり
410	130	計測なし	竹	23	34			算用数字 5 とあり
								算用数字 6 とあり
230	180	計測なし	萱	19	30			
340	200	計測なし	竹	24	37	糸目幅は平均値を示す (35~40)		算用数字 9 とあり
442	60	計測なし	竹	19	34.9		薄手の紙	
382	140	計測なし	萱	19	34			算用数字11とあり
482	170	計測なし	竹	21	42	糸目幅は平均値を示す (37~45)		算用数字12とあり
482	60	0.13	竹	24	33		薄手の紙	紙名なし
212	170	計測なし	布	19	計測なし		漉き返し	
900	60	計測なし	布	23	28	糸目幅は平均値を示す (22~32)		
918	110	計測なし	布	24	計測なし			
920	90	計測なし	布	24	22.8			
372	100	0.47	布	32	24	糸目幅は平均値を示す (20~25)		
944	140	0.6	布	32	24	糸目幅は平均値を示す (22~25)		
900	170	計測なし	布	24	24			
924	100	0.82	布	24	23	糸目幅は平均値を示す (20~27)		算用数字21とあり
974	150	計測なし	布	24	23			
935	110	0.71	布	24	24			
376	140	計測なし	布	32	計測なし			
							染紙	漢数字・産地名・紙名 の記載なし
								算用数字33とあり
								別紙「三十五番 大坂 産 金緞子揉昏」あり
								欠（現物なし） 欠（現物なし） 欠（現物なし）
								紙名なし
								算用数字45とあり
312	70	計測なし	竹	24	29			
420	130	計測なし	竹	24	32	糸目幅は平均値を示す (30~34)		

表 4

番号		産地名	紙名	紙質	地合	米粉	非繊維物質	泥	白土・胡粉	チリ	繊維束	縦寸法/mm
1	一	ジョーシュー	ハナイロホーショー									
2	二	ジョーシュー	コシキタンザク									
3	三番	ジョーシュー	ゴシキシキシ									
4	四	ジョーシュー	シキギョーセイ									
5	五	ジョーシュー	キョーハブタイ	楮	普通	○						156
6	六	ジョーシュー	キンギヤーナシヂ									
7	七	ジョーシュー	キンギヤーナシヂ									
8	八	ワシューヨシノ	ノベカミ	楮	普通				○		○	188
9	九	ワシュー	ヒヤーシウダ(ママ)	楮	普通							260
10	十	ワシューヨシノ	コシカミ	楮	良							220
11	十一	ワシューヨシノ	コスギハラカミ	楮	良							268
12	十二	ワシューウタコーリ	コシタテカミ	楮	良	○						326
13	十三	ワシューヨシノ		楮	普通							190
14	十四	セッシュュー	ミツギリチリ	楮	粗					○		132
15	十五	セッシュュー	ハナイロマニヤイ	雁斐	普通			○				360
16	十六	セッシュュー	アサキマニヤイ	雁斐	普通			○				366
17	十七	セッシュュー	チャマニヤイ	雁斐	普通			○				362
18	十八	セッシュュー	キマニヤイ	雁斐	普通			○				364
19	十九	セッシュュー	シロマニヤイ	雁斐	普通			○				368
20	二十	セッシュュー	子ツミマニヤイ	雁斐	普通			○				360
21	二十一	セッシュュー	タマゴマニヤイ	雁斐	普通			○				362
22	二十二	セッシュュー	チリマニヤイ	雁斐	普通			○				390
23	二十三	セッシュュー	フルテマニヤイ	雁斐	普通			○				364
24	二十四	セッシュュー	ウスヨーチューヨー	雁斐	普通							456
25	二十五	セッシュュー	クモカミ									
26												
27	二十七	セッシュュー	アヲマツバカミ									
28	二十八	セッシュュー	アカマツバカミ									
29	二十九	セッシュュー	ヤクタイシ									
30	三十	セッシュュー	シンカミ									
31	三十一	ヲーサカソメ	ゴシキカミ									
32	三十二	ヲーサカ	カラカミ									
33	三十三	ヲーサカ	エスギハラ									
34	三十四	ヲーサカ	フンシュカラカミ									
35	三十五	ヲーサカ										
36	三十六	ヲーサカソメ	アヲトサ									
37	三十七	ヲーサカ	エイリテホン									
38												
39												
40												
41	四十一	ヲーサカ	イシメカミ									
42	四十二	ヲーサカ										
43	四十三	ヲーサカ	チヨカミ									
44	四十四	ヲーサカ	モンビヨーシ									
45	四十五	ヲーサカ	エマキカミ									
46	四十六	ヲーサカ	カーフンシ									
47	四十七	スルカ	ハンシ	三椏	普通					○		230
48	四十八	スルカ	ハンキリ	三椏	普通					○		154

横寸法/ mm	厚さ/ μm	密度	澆簀の 種類	簀の目の本 数/3cm-1	糸目幅/ mm	備考 1	備考 2	備考 3
								紙背に記載
482	130	計測なし	竹	23	33	糸目幅は平均値を示す (25~40)		
458	260	計測なし	竹	24	34			紙背にオランダ語の記載あり
456	130	計測なし	竹	24	34			
438	110	計測なし	竹	24	37			
408	80	計測なし	萱	15	38	糸目幅は平均値を示す (34~40)		「テ」を「イ」に訂正
266	100	計測なし	竹	24	31	糸目幅は平均値を示す (27~35)		
680	90	計測なし	竹	26	35	糸目幅は平均値を示す (33~38)		
476	90	計測なし	竹	24	33			
398	60	計測なし	竹	23	33	糸目幅は平均値を示す (32~36)		産地名・紙名の記載なし 算用数字62とあり 欠（現物なし）
662	360	0.27	不明	計測なし	36		紙面に皺紋あり	
664	470	0.29	不明	計測なし	33		紙面に皺紋あり	
450	220	0.27	竹	26	31		紙面に皺紋あり	デンプン少量含む
538	260	計測なし	竹	24	30			
480	230	計測なし	竹	26	31			
440	170	計測なし	竹	26	30			
567	270	計測なし	竹	21	30			
880	140	計測なし	布	26	44	糸目幅は平均値を示す (43~47)		
342	90	計測なし	竹	24	50	糸目幅は平均値を示す (46~54)		
								欠（現物なし）
344	110	計測なし	竹	26	49	糸目幅は平均値を示す (47~51)		
304	100	計測なし	萱	17	不明			
340	60	計測なし	竹	22	44	糸目幅は平均値を示す (43~47)		
274	130	計測なし	竹	21	42	糸目幅は平均値を示す (37~47)		
476	140	計測なし	竹	24	43	糸目幅は平均値を示す (40~48)		「ミゾ」を「モロ」に訂正
390	70	計測なし	竹	24	45	糸目幅は平均値を示す (40~50)		
282	60	計測なし	竹	24	39	糸目幅は平均値を示す (30~52)		
440	110	計測なし	萱	17	36	糸目幅は平均値を示す (34~38)		
286	80	計測なし	竹	23	38	糸目幅は平均値を示す (36~40)		
470	160	計測なし	竹	24	32			
348	100	計測なし	竹	24	44			
300	90	計測なし	竹	24	43			
398	110	計測なし	竹	24	45			
436	130	計測なし	竹	24	49	糸目幅は平均値を示す (44~50)		

番号		産地名	紙名	紙質	地合	米粉	非繊維物質	泥	白土・胡粉	チリ	繊維束	縦寸法/mm
49	四十九	エド	渋揉昏									
50	五十	エド	リキウシ									
51	五十一	エド	サラサカミ									
52	五十二	ショーシュー	ニシノウチカミ	楮	良	○						336
53	五十三	ショーシュー	ホトムラカミ	楮	良	○						328
54	五十四	ミノ	ヲーナヲシ	楮	良		○					326
55	五十五	ミノ	チューナヲシ	楮	良		○					308
56	五十六	ミノ	ショインシ	楮	良		○					278
57	五十七	ミノ	コギク	楮	良		○					210
58	五十八	ミノ	ミツヲリショテンシ	楮	良		○					254
59	五十九	ミノ	フタツヲリショテンシ	楮	良		○					255
60	六十	ミノ	モンショテンシ									
61	六十一	ミノ	モンテングジュウ									
62	六十二											281
63												
64	六十四	ミノ	アサキハンキリ									
65	六十五	エッシュウ	ヲータカタンシ	楮	良							506
66	六十六	エッシュウ	チータカタンシ	楮	良							508
67	六十七	エッシュウヲームシ	ショータカタンシ	楮	良	○						326
68	六十八	エッシュウ	ヲーホーショーシ	楮	良	○						335
69	六十九	エッシュウ	チューホーショーシ	楮	良	○						348
70	七十	エッシュウ	コホーシューカミ	楮	良	○						325
71	七十一	エチゼン	コゼンヒロホーシュー	楮	良	○						394
72	七十二	エチゼン	スミナガシクモカミ									
73	七十三	エチゼン	キマニヤイ	雁斐	良				○			415
74	七十四	セキシウ	ハンシ	楮	普通		○				○	242
75												
76	七十六	セキシウハマダ	ハンシ	楮	良		○				○	248
77	七十七	バンシュー	フタツヲリカミ	楮	普通		○				○	218
78	七十八	ゲイシューヒロシマ	ハンシ	楮	普通	○					○	254
79	七十九	ゲイシューヒロシマ	チリカミ	楮	粗		○			○	○	196
80	八十	ケイシューヒロシマ	モロクチ	楮	普通				○		○	294
81	八十一	ゲイシューヒロシマ	子ヅミハンキリ	楮	普通						○	148
82	八十二	ケイシューヒロシマ	シロホ	楮	普通				○		○	209
83	八十三	ケイシューヒロシマ	チウスギハラ	楮	普通	○					○	311
84	八十四	ケイシューヒロシマ	コハンシ	楮	普通				○		○	206
85	八十五	ケイシューヒロシマ	ミヨシポーショー	楮	良	○						342
86	八十六	ポーシューイワクニ	ハンシ	楮	良	○					○	252
87	八十七	ポーシューミタジリ	チリカミ	楮	普通					○	○	210
88	八十八	ポーシューイワクニ	ゴヨーカミ	楮	良	○					○	260
89	八十九	ポーシューイワクニ	カタヲリカミ	楮	良	○					○	288

横寸法/ mm	厚さ/ μm	密度	澆簣の 種類	簣の目の本 数/3cm-1	糸目幅/ mm	備考 1	備考 2	備考 3
356	150	計測なし	竹	23	43	糸目幅は平均値を示す (42~45)		別筆「アツ」あり
216	110	計測なし	竹	26	40			
450	150	計測なし	萱	20	54	糸目幅は平均値を示す (52~56)		
478	210	計測なし	萱	16	40	糸目幅は平均値を示す (38~42)	繊維長が長い	
482	140	計測なし	竹	22	35	糸目幅は平均値を示す (29~41)	繊維長が長い	
710	220	計測なし	竹	23	31			
342	120	計測なし	竹	26	34	糸目幅は平均値を示す (32~36)		
488	100	0.28	竹	24	33	糸目幅は平均値を示す (31~35)		
482	170	計測なし	竹	26	32			
488	120	計測なし	竹	24	33	糸目幅は平均値を示す (30~34)		
430	320	計測なし	竹	21	42	糸目幅は平均値を示す (39~48)		
340	100	計測なし	竹	24	39			
325	90	計測なし	竹	24	33	糸目幅は平均値を示す (32~35)		「ヅ」を「ス」に訂正
426	170	計測なし	萱	16	不明			
428	150	計測なし	竹	24	38			
438	210	計測なし	萱	20	33	糸目幅は平均値を示す (38~46)		
400	120	計測なし	萱	16	43			
497	130	計測なし	竹	23	33	糸目幅は平均値を示す (29~38)		
406	130	計測なし	竹	24	37	糸目幅は平均値を示す (33~41)		
461	250	計測なし	萱	19	35	糸目幅は平均値を示す (33~39)		
260	110	0.18	萱	20	33			
394	170	計測なし	萱	18	45			
298	110	計測なし	竹	20	32	糸目幅は平均値を示す (30~35)		
462	160	計測なし	萱	15	40	糸目幅は平均値を示す (38~42)		
464	160	計測なし	萱	15	32	糸目幅は平均値を示す (29~33)		
570	100	計測なし	竹	24	21or37		繊維長が長い	
342	80	計測なし	竹	23	32	糸目幅は平均値を示す (30~33)	繊維長が長い	
413	100	計測なし	竹	23	40	糸目幅は平均値を示す (37~48)	繊維長が長い	
560	80	計測なし	竹	24	35	糸目幅は平均値を示す (33~36)	繊維長が長い	
332	70	計測なし	竹	22	32		繊維長が長い	
424	100	計測なし	竹	22	34		繊維長が長い	
382	90	計測なし	竹	30	30	糸目幅は平均値を示す (29~32)	繊維長が長い	
696	90	計測なし	竹	24	35	糸目幅は平均値を示す (31~36)	繊維長が長い	
441	100	計測なし	竹	30	33	糸目幅は平均値を示す (23~37)	繊維長が長い	

番号		産地名	紙名	紙質	地合	米粉	非繊維物質	泥	白土・胡粉	チリ	繊維束	縦寸法/mm
90	九十	チョーシュー	アツハンシ	楮	普通						○	256
91	九十一	キシュー	ノベカミ	楮	普通				○		○	168
92	九十二	アワ	カサカミ	楮	普通				○			314
93	九十三	アワ	ホンゴクサラシカミ	楮	普通		○				○	322
94	九十四	アワスモト	チウコクサラシカミ	楮	普通		○				○	328
95	九十五	アワ	ハナイロウダカミ									
96	九十六	アワ	コンウダカミ									
97	九十七	アワ	タケナガカミ	楮	良	○						462
98	九十八	ヨシューマツヤマ	ハンシ	楮	普通	○					○	248
99	九十九	ヨシューラーツ	ホーショー	楮	良	○						358
100	百	ヨシューマツヤマ	ホーショー	楮	良	○						354
101	百一	ヨシューシントニ	ホーショー	楮	良	○						370
102	百二	ヨシューヨシタ	センクワ	楮	普通		○				○	326
103	百三	ヨシューラーツ	ハンシ	楮	普通		○					248
104	百四	ヨシューラース	チリカミ	楮	普通					○	○	236
105	百五	ヨシューウハシマ	センクワ	楮	普通		○				○	320
106	百六	ヨシューラーツ	ナカゴシ	楮	普通							328
107	百七	ヨシューラーツ	センクワ	楮	普通		○				○	324
108	百八	ヨシューウハシマ	シタゴシ	楮	普通		○			○		306
109	百九	トサ	ホーショー	楮	良	○						354
110	百十	トサシモタ	ラーハンシ	楮	普通		○				○	276
111	百十一	トサハタ	センクワカミ	楮	良		○				○	319
112	百十二	トサ	コスキ	楮	普通		○				○	192
113	百十三	トサ	アツカミ	楮	普通		○				○	294
114	百十四	トサ	ハンシ	楮	普通		○				○	228
115	百十五	トサ	セイチョーシ	楮	良							310
116	百十六	トサ	ホンヤクタイシ	雁斐	良							312
117	百十七	ブゼン	ハンキリ	楮	良		○				○	168
118	百十八	ブゼン	ハンシ	楮	良		○				○	252
119	百十九	ブゼン	ヒロスキカミ	楮	普通	○					○	273
120	百二十	チクゼン	ハンキリ	楮	良		○				○	166
121	百二十一	チクセン	ハンシ	楮	良		○				○	251
122	百二十二	チクセン	チウスギハラ	楮	普通	○					○	320
123	百二十三	チクゴ	ミノカミ	楮	良		○			○	○	264
124	百二十四	ヒシュー	ロクスンハンキリ	楮	良		○				○	172
125	百二十五	ヒシュー	ウダカミ	楮	普通	○					○	306

横寸法/ mm	厚さ/ μm	密度	澆管の 種類	簀の目の本 数/3cm-1	糸目幅/ mm	備考 1	備考 2	備考 3
458	130	計測なし	萱	17	31	糸目幅は平均値を示す (29~33)	繊維長が長い	
668	70	計測なし	萱	19	30		繊維長が長い	
672	70	計測なし	竹	21	31	糸目幅は平均値を示す (29~32)	繊維長が長い	
296	60	計測なし	萱	19	29	糸目幅は平均値を示す (27~31)	繊維長が長い	
348	80	計測なし	竹	24	30.9		繊維長が長い	

番号		産地名	紙名	紙質	地合	米粉	非繊維物質	泥	白土・胡粉	チリ	繊維束	縦寸法/mm
126	百二十六	ヒウガ	ウダカミ	楮	普通	○					○	318
127	百二十七	ヒウカタカラカ	ハンキリ	楮	良		○				○	166
128	百二十八	ヒウカタカラカ	ロクスンハンキリ	楮	良		○				○	179
129	百二十九	サツマ	チリカミ	楮	粗		○			○	○	211
130	百三十	ヒウカイトー	ハンシ	楮	普通	○					○	249

【凡例】

1. 本一覧表は、オランダ ライデン国立民族学博物館に所蔵されているシーボルトコレクションの『大日本諸国名産紙集』所収の紙130点を顕微鏡による非破壊調査を行い、概要を示したものである。
2. 「番号」は、便宜上点数を示すものとして算用数字を用いた。漢数字は原本に表記されているものをそのまま用いた。
3. 「産地名」「紙名」は、原本に表記されているものをそのまま用いた。
4. 「縦横寸法」・「厚さ」・「密度」・「漉簣の種類」・「簣の目の本数」・「糸目幅」の項目は、稲葉政満(研究代表者)『江戸のモノづくり ライデン国立民族学博物館所蔵 シーボルト和紙コレクションの紙質調査 科学研究費補助金研究成果報告書』(2006年3月)別表1 シーボルト和紙コレクション紙質調査結果をもとにして加工したものである。
5. 備考1には、糸目幅の実数値を示した。この数値も4項と同様である。
6. 備考2には、紙に関する補足を示した。
7. 備考3には、書誌的な補足を示した。
8. 本表に示した薄い網掛けは、今回の調査対象外のものを示した。濃い網掛けは、現物のないものを示した。